
白き御遣いと神子

木谷 亮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白き御遣いと神子

【Nコード】

N4538W

【作者名】

木谷 亮

【あらすじ】

翼のある白毛の獣に転生した叶五香^{かのういつか}38歳独身。

いくら空も飛べるし炎も吐けると言われても、人間であったときの記憶が邪魔をして上手く出来ない。

おまけに餌となる生き物は捕まえられたとしても殺して食べるなんてとてもとても……。むしろ可愛がりたいんですが。

木の実を食べようにも、木の上にあるそれらを取るには木登りしなければ————ってこんな無理ゲー、できるか————!!!

やがてある青年と出会い、この世界での己の役割に気付いていくお話です。

あまり重くならないように軽めを心がけて書いていきたいとお
す。

第1話 白い獣

———大地を蹴る。走る。跳ぶ。

全速力で地を駆ける私の早さは、この山でも文句なしに断トツ。風を切る感覚が実に心地いい。私はこの感覚が大好きなのだ。

それから、近くの水場へ行き、大量に水をガブガブ。

うん、全力で走った後の水はウマイ！

この水場は山から湧き出したばかりの水が窪地に溜まってできた、小さな泉みたいところだ。

湧きたてホヤホヤの綺麗な水は、全力で走った後だからということ差し置いて、とても美味しい。

この泉の端からは山裾へ向けて水が流れ出しており、小さな川を作っている。もう少し川下へ行くとキラキラした魚も住んでいて、さらに下っていくと人間が作った町がある。

ま、私は行かないけどね。

私は思う存分喉を潤すと、のっそりと立ち上がって今日の食料確保に動き出した。

泉から離れる直前、チラリと水面に目をやれば、そこに見えるのは一匹の獣。

模様のない虎のような真っ白な毛で全身を覆われ、背中に翼を生やした四足の獣。

それが、今の私の姿だ。

私は人間だったころの記憶を持っている。
輪廻転生の観点で言うところの、いわゆる前世だ。

前世を覚えてるなんてあまり無いことだと思っていたが、案外他人に話せないだけで良くあることなのかもしれない。

だって、ほら。私だって前世覚えていたって、獣姿じゃ誰にも話しようがないでしょ。

この世に生きるモノは人間だけじゃない。無数にいる動植物、そして虫だって、そのひとつひとつが命なわけで。

その中には、私みたいに前世を覚えて生きている生き物が他にも居たっておかしくない。

でも前世の記憶なんてものは、憶えていたって大した役に立たない。むしろ今の私にとって前世の記憶はどちらかと言えば邪魔なくらいだ。

「グウアアア!!」

ドシン、と地響きを立てて私の体が地面に叩きつけられる。

(あいたたたた……)

背中に痛みが走り、つついっい吼え声が上がってしまった。いやはや、お恥ずかしい。

虎なら猫科だから受け身くらい取れそうなものなんだけどなあ。やっぱ、人間の記憶が邪魔しているんだろうな。背中の翼だって、かろうじて翼を小さくしたり大きくしたりはできるようになったけど、使い方がまいち分かんないし。

本能だけで生きてればこんな情けない状態になんかならなかっただ

ろうに、と思うとますます前世の記憶が邪魔ものに思えてくる。

おなかを空に向けた屈辱的ポーズのまま、私は恨みがましげに自分の頭上に見える木の実を見つめた。

真っ赤に色づいたリンゴっぽい木の実。

私はそれを取ろうと思って、木に前足の爪を立てて登ろうとしたはいいものの、落下してしまったのだ。

「ウ…ガルウウ…（おなか、すいたな…）」

傍目にはまったく分からないだろうが、私は情けなく眉をへニヨツとさせる。

ここ数日食べれそうな果実をなかなか見つけれず、ろくに食事もできていなかったところに、このリンゴもどきだ。高い高い木の枝に生るリンゴもどきは獲るのが難しそうだが、ちょっと諦めきれない。

仮にも肉食動物なんだから、狩りでもして肉を食べるんじゃないのか？…：…なあって全く知らない人が見れば、そう思うだろう。

確かに、私もそう思った。

だから草むらに身を潜め、油断していたウサギ（にしては耳がやたら長すぎるが）もどきに一気に飛びかかり、捕まえたりもしてみた。

だが。

ああそうよ、私にはアイツらは食べられない！

生まれ変わってからこっち、いつだって人間の記憶が私の生きる道を塞いでいくのだ。

だって食べられる？！

プルプルと小刻みに震える、小さな可愛い生き物を！！

無理！私には無理だ！あんなに可愛い生き物を爪で引き裂き、その柔らかな毛皮に牙を立て、生肉を………ウボオエエエ無理無理無理無理！想像しただけで吐くわ！泣くわ！

そんなわけで私が食べられそうなものといったら、この山には果物か木の実くらいしかない。

ちなみに川にいる魚も無理だ。

生魚は刺身になって醤油が付いていないと食べられません。贅沢言
って悪いか！

第2話 生まれてから半年間のこと

私はこの山で生まれた時から、ずっと一人で生きてきた。

別に育児放棄されたというわけでもない。気がついたときには、ただ、私という存在だけがたった一匹、ここに生まれていたのだ。

たぶん、私には母親とか父親そのものがないんじゃないかな。自分のことながら良く分からないけど、そんな気がする。

分からないと言えば、そもそも私は何という生物なのかすら分からない。初めて自分の姿を見たとき「もしかしてホワイタイガー？」とか思ったけど……………、うん。ホワイタイガーに翼は生えません。

私には、生まれた瞬間から前世の記憶が存在していた。

前世の名前？

もちろんちゃんと覚えていますとも。

かのういつか
叶五香、38歳。ついでに独身で、会社員。それが……前世の私。大手商社でバリバリ働くキャリアウーマンで、自慢は夜景が綺麗に見えるマンションに住んでいること……といえば聞こえはいいが、ぶっちゃけて人生の負け組でした。ハイ。

友達は今々と結婚し、「五香は仕事ができてカッコイイねー」なんて私を羨みつつも皆幸せそうに我が子をその腕に抱き。

彼氏と眺めればロマンチックな気分になれるであろう夜景の綺麗な自慢のマンションは、実はシングル用マンションで、一人ぼっちで酒飲んで寝る毎日。

夜景？そんなの関係無いわぁあ！通勤に便利だったから、ってだけだもん。あのマンション選んだの。……寂しいヤツとか言うな！

——正直なところ……、前世の自分の死因は分からない。
気がついたら既にここにいたからねえ。

まあ、毎日あれだけ不摂生な生活して酒かっくらってたのだ。肝臓か心臓か、何かの病気にでもなったのかもしれない。

生まれ変わった今となっては、自分が死んだことを大して気に病んでもいないけど。

ともかく生まれたての私は、しかし生まれたてにしてはしっかりした足取りで、山を歩き回った。

まず寝ぐらを見つけなければ、と本能が促したのだろう。

やがて寝ぐらに良さそうな洞穴を見つけ、そこにいたキツネっぽい
がキツネよりかなり体の大きな動物の家族を追いついて、そのまま
その洞穴を我が家にすることにした。

ハハハ、鬼だって？ いえいえ獣です。

そりゃ少しは「キツネ(?)」一家に申し訳ない」とか思ったけど、
こっちだって生活がかかってるからね。住むところは大事ですよ。
コチラとしてはキツネ一家と同居するのも吝かでもなかったけど、
アチラのほうがノーサンキューだったらしい。

そりゃそうだ、いくらまだ生まれたてとはいえ、こんな見るからに
バカでかい肉食獣っぽいのと一緒には住めまい。

洞穴の奥には貯蔵された木の実類やネズミっぽいものの死骸が転がっ
ていて、せっかくなので私はありがたく食料も頂くことにした。

フフフ、鬼だって？ いえいえしつこいようですが獣です。世の中弱
肉強食なのです。

お腹が減っていた私は、前足で器用に木の実を掴んで齧り付くと、
後ろ足でネズミ(?)の死骸を洞穴の外へと蹴っ飛ばした。

私の素晴らしくレベルが上がった脚力は、一撃で不要な食糧を吹っ飛ばしていく。というか食えるか、こんなもん！

死骸はそのまま放置しておいたんだけど、気がついたら無くなってたから、多分どっかの動物が持っていたのだろう。

持って行ってもらって良かった、玄関先で腐ったら嫌だなあと思ってたんだよね。

山は食物の宝庫だ。

獣としては偏食の激しい私でも生き延びられる程度に、果物やら山菜やらがそこら中にあっし、水浴びもできるような水場だって洞穴からそう遠くないところにある。

それに天敵になるような獰猛な動物がいなかったことも幸いした。

というか私が一番獰猛っぽいぞ。見た目だけだけど。

おかげで小動物には怖がられる怖がられる……。

それでもここで暮らして半年ほど経つ。

一回も彼ら小動物を襲わないどころか、猛禽類に狙われているところを助けたり、溺れてるところを助けたり、獲ってみたはいいものの生臭くて食べれなかった魚なんかを貢いだりしたおかげか、最近では警戒心もだいぶ薄れてきたみたい。

私が木陰でお昼寝とかしていると近寄って来て、フンフン匂いを嗅いで舐めてくれたりもするようになった。

あまりにもそれが可愛いからついギュ〜ッとしたくなるんだけど、実際にやったらひ弱なこの子たちのことだ、簡単に死んでしまうだろうと想像がついた。うう、この強靱な体が恨めしい。

第3話 山の食糧事情

山の生活にも獣の体にも慣れてきた。

と言っても、翼はもうハッキリキツパリお飾りだね！背中に付いてるくらいだから使えるんだろうけど、力の入れ方とか分かんないし、アクセサリーとして認識してる今日この頃です。

私が主に活躍させるのは、前足。

人間だったころの記憶のせいか、獣にしちゃあかなり器用に動かせているほう。

だって、ほら見てほら見て！

こうやって肉球の間に石を掴んでだね。

——ヒュッ——…ボトッ——

っと、いう具合にリングもどきに石を投げつけて落とす、なんて芸当もできるわけなのだ。凄いでしょ？サーカスにも本気で入れます。うん。中途半端に木に登って転がり落ちる前に、最初から石投げれば良かったじゃないか、と思うよね。自分でもそう思う。後悔という言葉はね、後に悔いると書くから後悔なのです。……私が一番悔いてるんだよ！

しかし、前世の記憶というのは「こういう時に役に立つな」と私は認識を改めた。

生肉食べられなかったり、獣らしい軽やかな動きがいまいち出来なかったりと、マイナスなことのほうが多い気もするけど、たまには良いこともあるらしい。

私が石で落としたリンゴもどきは、そこそこの収穫になった。
全部で30個くらい？ いやぁ頑張った頑張った。

これで明日……食べる量を我慢すれば明後日くらいまでは、空腹をしのぐことができる。

私はホクホク顔（たぶん見た目には分からないけど）で、木の枝で粗く作ったカゴの中にリンゴを入れていく。

本当に目の粗い、どっちかというところ「鳥の巣？」という感じのカゴだが、我ながら「よくぞ作った！」と思う快心の作品だ。

なぜなら、このアニマルなお手手ではね、カゴは編めないのですよ……。だからいろんな形の枝を拾ってきて、生け花のように、いやむしろパズルのように組み合わせて作ったのが、このカゴというわけ。

どうだ！ 凄いだろう！

前世知識、またしても役に立ちました。

リンゴもどきを我が家（洞穴）に持ち帰り、ホッと一息つく。

収穫してきたばかりのリンゴもどきをひとつ口に入れ、芯ごとバキバキに噛み砕いた。

「グガア、グルルウ（うーん、ジューシー）」

この逞しい顎は、食材を無駄にするということがない。種だろうが芯だろうが、私の歯と顎の前ではスポンジのようなもんだ。

どうしても口の構造的に、口の端から果汁が零れてしまうのだけが

難点なんだけどね。まあ、零れた分も舐めとっちゃうから問題ないけど。勿体ない、勿体ない。

しかしバキバキジャクジャク咀嚼しつつも頭に浮かぶのは、最近の食料事情への不安だ。

ここ数週間、目に見えてこの山から食料が減っていった。

それは「私が食べ尽くしたから」とか「季節が冬に近づいたから」という理由では、絶対的にない。

なぜ絶対的に、とまで言えるか。

それは、まず第一に、私が食べ尽くすほどこの山に生る果物は少ないからだ。

元々多くの果実が実っていたというのもあるが、この山は花を咲かせ実を付けるまでのスピードが異常に早い。

私が？いってしまったこの実だって、数日も経てばまた同じようにそこに実を付ける。

だから私がこの山に生まれて半年間、高い枝に生っているようなリングもどきなんて狙わなくても、低いところに生っている果物だけをお腹一杯に食べてこられたのだ。

それが、最近はなかなか実を付けなくなってしまった。今日や明日はこのリングもどきを食べていられるが、そのあとはまた食べ物を探すのに苦労するだろう。

そして第二に、季節についてだが…。

この山にはどうやら四季というものが無いようなのだ。

半年間ここにいるが、気温も気候も毎日似たり寄ったり。たまに雨が降ることもあるが、嵐になるほどではない。

つまり、環境は何も変わっていないのだ。

なのに、なぜ。

急に、獲れる果実の量が減ってきたのか。

私はその答えを知ることができたのは、それからもうしばらく後のことだった。

第4話 落ちてた人間

その日も、私は食料を探しに山を歩いていた。

獲れる果実は、この間のリンゴもどき以降大量には見つからないけど、それでも何とか細々とやっていける程度にはある。

それに山菜もあるし。

本能ってすごいね！「これは食べれる」「これは食べれない」っていうのが何となく分かるんだよね。

おかげで山菜採りのとき、大変助かってます。ビバ、本能！

昨日までは少し遠い岩場あたりまで足を延ばして食料を探しに行っていたけど、今日は久しぶりに水場近くの採集ポイントへ向かう。水場近くって言うっても、いつも水を飲んでいる泉の付近じゃなくて、そこから少し川下へ下ったあたり。

その辺りには木苺もどきがいっぱい生っているポイントがあるのだ。最近では果実が獲れる量も減ったけど、そこへはもう3週間近く行っていない。そろそろ実を付けていてもおかしくないだろう。今日のご飯は、少しは期待出来そうだ。

タツタカタツタカ、テンションを上げて泉のところから川下へと川沿いに歩いて行く。

スキップする獣というのも、なかなかお目見得できない光景だ。だが私にはできる！ふふん。

前世の記憶が、こんなところでも無駄に活きている。いよいよサークス入団への道も開けそうだ。入らないけど。

上機嫌に歩いていると、何かがポツンと落ちているのが見えた。

（むちゃくちゃ大きい……：蓑虫？）

山では見慣れない物体に警戒して、とりあえず遠くから眺める。
鼻や耳をヒクヒクピクピクさせて気配を探った。

知らないけれど、知っているような匂い。なんだか懐かしいような、
初めてのような。

小さく聞こえる息使いに時折「う、うう……」とうめき声が混じる
のが聞こえ、私はその不思議な感覚の正体を知った。

（人間だ！うわ、生まれ変わって初めて人間に会ったわ）

糞虫のように見えたのも、どうやら茶色の布に包まれているからだ
と分かった。布……というかマントかローブ？だろうか。

私は人間の近くまでソロソロと近寄って行く。

その間も、周囲への警戒は怠らない。

もしも近くに他の人間がいて、この人間に近寄って行く私を見られ
たら、私はまるで「落ちてる人間を食べようとしている猛獣」にし
か見えないではないか！

それはマズイ。非常にマズイ。

私は温厚な猛獣なのだ。

狩りも出来ないのに、勘違いした人間に逆に狩られたら阿呆みたい
だ。

しばらく気配を探ってみたが、周りには私たち以外誰もいないよう
だった。

それに安心して、糞虫状態の人間に近寄って、鼻先を押しあてた。
血の匂いはしない。

だが、何だか衰弱しているみたいだ。

（この布、邪魔くさい）

私は前足の爪を使って、人間を傷つけないように慎重に布を引き剥がした。

人間の全身が見えるようになり、私は探るような目で見下ろす。

人間は、身なりの良い男だった。

まだ若い。20代の後半くらいか。

キラキラと陽に透ける長い金髪は首の後ろで括られていて、いかにも高貴そうな顔をスツキリと見せていた。

（うーん王子様キャラだなあ。ヨシ、こいつは「王子」と呼ぼう）

私は勝手に名前を付けた。

私の口の構造上、この人間の名を呼ぶことはまかり間違ってもないだろうが、名前をつい付けたくなくなってしまうのは前世の記憶のせいだろうか。

ところで王子、やたらと弱っていた。

先ほど鼻で確かめたとおり怪我はしていないようだが、このまま放置すれば、まあ……命はないだろうな。

それに、この山には肉食獣もいる。今までは大丈夫だったようだが、この状態が続けば、いずれは餌食になることも考えられた。……………

…あ、私じゃないからね?! 私は自他共に認める草食系肉食獣です。

しばらく「ングルウウ（うーん）」と悩んで。

……………。

……………。

∴。

ハハハハハ、巣穴に連れてきちゃったよ！

今は私の作った葉っぱベッド（with私の抜け毛）で寝かせてるよ！

ところでどうしよう、この人間！

第5話 人間のお世話

私の抜け毛付きベッドはそんなに臭いのか。

王子（仮称）は意識のないままに鼻を手で覆って寝ていた。……悪かったな！臭くて！

結局、巣穴に連れて来たのはいいものの、私は王子の処遇に困ってしまっていた。

明らかに具合悪そうだけど、獣の私にはどうしようもない。

かと言って、あのままあの場に放置していれば、王子の命は確実に失われていただろう。

前世の、人間の記憶がある私としては、そのままになんてしておけそうにもなかった。

（でもなあ。病人の処置っていったら、やっぱりベッドに寝かせて、栄養ある物食べさせて————って私も栄養あるもの食いたいわけ！）

前世の私ってお節介だったかなあ、なんて思いながらもとりあえずせつせと葉っぱベッド第二弾を作成していく。

今作っている葉っぱベッドは王子専用のものだ。さすがに私の抜け毛付きベッドじゃ可哀想だしね。

それにそれ、私専用なの。

マイベッドなの。

ただの葉っぱの寄せ集めだろうが何だろうが、愛着のあるベッドだから他人には貸したくないわけ。

トットコ歩いて、巣穴の外へ。

背中を翼を大きくしてから腕で囲うような形に広げて、大雑把に集めた葉っぱを運搬する。

この翼って大きさが自在なのがいいよね！

さすがに狭い我が家では広げたままだと窮屈だから小さく小さくしてるけど、こういうときにはとっても便利。

大体集め終わったら、巣穴のマイベッドの近くにドサアツと積み上げる。これで完成！ただの葉っぱの山と呼んではならない。あくまで「葉っぱベッド」だ。

王子を転がしてうつ伏せにし、その腹の下に頭を突っ込んで私の首の上に乗せると、新しく作ったベッドへと移動させる。

ゴロンと仰向けに生るように転がし、後ろ足で余った葉っぱを蹴り、王子の体の上にフンワリと覆うように葉っぱを乗せる。葉っぱしかないけど、毛布代わりだ。

王子のベッド作りを終え、私はマイベッドに腰を下ろすと「ガフウッ」と溜息をついた。

はー、やれやれ。

我ながら面倒くさいものを拾っちゃったもんだ。

しばらく王子の様子を見ていたが、起きる気配が無いので私は出掛けることにした。

結局、目的だった野苺も食べられなかったし、今日の食料を確保せねばならない。

お手製の籠を口に咥え、王子を拾った河原近くの野苺ポイントへ向かう。

（おおー！あったあった、そこそこ生ってるじゃない）

予想通り、野苺は鈴なりに実を付けていた。

幾つもなっている苺のうち一つをそっと口に入れ、久しぶりの酸っぱい味にウツトリと酔いしれる。うーんウマイッ！

野苺はあまり腹には溜まらないが、その味は満足できるものなので私は好んで食べるほうだ。

前世が無類の苺好きであったことも、影響しているのかもしれない。しばらくハグハグと口に使っていたが、途中でハッと王子の存在を思い出した。

（何か、食べ物与えてやらないと）

ちょっと勿体ない気もしたが、野苺を薦ごとブチッと引き千切って籠に入れる。それを何回か繰り返し返して、籠の3分の1ほどが埋まったところで野苺がなくなった。

籠いっぱいにはいかなかったが、とりあえずこれくらいあれば人間一人の食事にはなるだろう。

私は籠を口に咥えると「ウグウルルウ…（王子起きたかなあ…）」と独り言を呟きながら、再び巣穴のほうへと戻って行った。

第6話 生きる

私が巣穴へと戻ると、王子はすでに起きていた。

（あー……相当辛そうね）

顔色は真っ青で明らかに具合が悪そうだ。

しかし彼は、全身に力を入れて身を起こし、全力で私を警戒していた。

どうでもいいけど、葉っぱベッドに埋もれて警戒されても迫力ゼロ
ですぜ、ダンナ！

私は王子を無視してトコトコと巣穴の奥へ向かうと、「貯蔵庫」と
定めた場所に野苺入り籠を置いた。

貯蔵庫といっても箱があるわけじゃなくて、ただの地面なんだけど
ね。前の住民（追い出したキツネ一家）時代からそこは食べ物置き
場になっている場所だから、私もなんとなく「貯蔵庫」と呼んで使
っているわけです。ハイ。

王子は相変わらず息を潜めてこちらを注視している。

おそらくここから逃げ出したいとは思っているが、体が言うことを
聞かないのだろう。こちらのほうを向いて体を強張らせるだけで精
いっぱいに見えた。

人間が獣^{わたし}を警戒する気持ちも分かるのであまり気にはしないが、こ
うも警戒されると少し哀しいものもある。

せっかく久しぶりに見た人間だから、できれば仲良くしたいけど……
……………この分じゃ、無理っぽいかな。

私が動きもせずにはばらく王子をジーツと見ていると、何やら覚悟が付いたのか、王子は少しためらいながらも静かに声を発した。

「お前は……私を食うつもりか」

意外にも落ち着いていたその声は、静まり返った巣穴に大きく響いた。

さもありなん。

いかにも肉食獣な獣の巣穴に寝かされてちゃ、そう思うよねー。でも食わないよ。ていうか私にはカニバリズムの趣味はないからね！

「グウガアアウ（そんなつもりないよ）」

と答えてみたが。

うーん、私の野太い声に王子の警戒心がさらに上昇中！
しかし「食うつもりか」と聞かれたって、獣の私にゃ「そうだよー」とも「そんなことないよー」とも答えられないのだから仕方ないじゃないの。

そうこうしているうちに、王子の体力が限界を迎えたのだろう。
葉っぱベッドにボスツと埋まると、小さな声で「……どちらにせよ、私は動けぬ。好きに食うがいい」と呟いた。
その様子は、少し投げやりで。

（……なによ、それ。生を諦めたってわけ？）

スツと心が冷えるのを感じた。

私は生まれ変わってから、ずっとヒトリボッチだった。

父も母もなく、同族もない。

要らない人間の記憶があるせいで獣になりきることもできず、私は酷く中途半端な生き物で。

翼があるのに飛べないし、木に登ることだってできない。獣の体のせいで四肢を思うように使えず、野苺を摘んでくるのだって、蔦ごと引き千切らなきゃ摘めない。

それでも私が生きるのを諦めたことは、ない。

生肉や生魚は食べられなかったけど、果物を探し歩いて食べて。

人間のときみたいな便利生活は送れないけど、少しは快適に暮らそうと葉っぱでベッドを作ってみたり。籠を作ってみたり。

だから————王子には、生きることを諦めてほしくなかった。

どんなにみじめだっていい、最後の瞬間まで生き足掻いてほしいのだ。

今。王子は目を瞑って、「その時」を待っている。命が終わる、その時を。

でも、死なせてあげない。

意地でも私が生かしてあげる。

このままじゃ、結局は衰弱して死んじゃうかもしれないけど。どうにかして、生かしてみせる。

———このときが。

気まぐれで拾ったこの人間を絶対に生かして返すのだ、と私が強い決意を固めた瞬間だった。

第7話 王子との交流

この人間を絶対に生かす、と決意を固めてからの私の日常は、とても忙しくなった。

なにせ一人と一匹分の食料確保と看病をしなければならないのだ。ただでさえ乏しい最近の食糧事情だ、それはなかなか大変な苦労を私に強いた。

（ほれほれ。これでもお食べー）

下手に声を出すとまた警戒されてしまうと思い、口に出さずにジェスチャーで全てを伝える。

今は「これ食べろよ」という感じに、右手と左手で掴んだブドウもどきを口に運ぶマネをしてみせ、最後にそのまま両手で王子にブドウもどきを捧げ持つように差し出している。

獣としてのプライドをガンガンに落としかねないそのポーズだが、肉球で掴んで片手で「ホイ」と渡すにはブドウもどきは柔らかすぎるのだ。

ブドウもどきを潰さないようにソツと持つにはこの「捧げ持ち」ポーズしかないのだから仕方ないのだが、立派な体格を持つ虎（？）としてはいかがなものか。や、別に大したプライドは無いんだけどさ。

そんな獣らしからぬ愉快的姿に、王子はプツと噴き出して私からニコヤカにブドウもどきを受け取った。

「ありがとう。……いつもすまぬな」

王子はそう御礼を言ってから、ブドウもどきをひとつ摘んで口に含む。

味が口に合ったのか「これは旨いな」と次々に食べていく様子を見ながら、私はここに王子を連れてきた当初のことを思い出していた。

（王子も随分慣れたなあ……。あんなに警戒してたのが嘘みたいだねえ）

王子が目覚めてからしばらくは、彼は私への警戒を解くことは無かった。

見た目に肉食獣な私の巣に連れ込まれていたのだ、命を失う覚悟まで決めていたみたいだし、そりゃ警戒するのも無理はない。

見るからに具合の悪そうな王子に、私は採ってきたばかりの野苺を食べるようにしきりに勧めたものだが、訝しげな顔で私と野苺を見比べるばかりで結局食べなかったっけ。

それが、こうして私の手から食べ物を受け取って食べるまでに至るには、それはそれは情けなくも恥ずかしい道のりがあったですね。

王子は一通りブドウもどきを食べ終わると、満足のため息を小さく漏らし、それから私を眺めた。

（そのただひたすら黙って人……。あ、獣か……。獣を見る目線、止めてほしいんですけど）

なんだかモゾモゾとした気持ちになりつつ、私も何となくジッと王子を見つめてしまう。うーんサラサラ金髪が今日も綺麗だ。

王子とそのまま見つめあっていたが、しばらくしてから私はハッと
する。

（あ。王子寝かさなきゃ！）

具合の悪い人には、栄養あるもの食べさせて、ひたすら寝かせる。他に看病らしい看病ができない獣の身としてはそれくらいしかできることがないので、キツチリ寝かさなければと私は気合を入れた。

とりあえず「そろそろ寝なよー」と伝えるために、最近ではお馴染みとなった「おやすみなさいのポーズ」を取る。

両手の肉球と肉球を合わせた状態で、その手を左頬の下に当てて小首を傾げる、獣らしからぬポーズだ。

初めてこのポーズを王子の前でしてみせたときはポカーンと口を開けて驚かれたものだが、このポーズのおかげで王子の警戒が一気に霧散し、私から食べ物を受け取るようになったのだと思えば、何度でもしてやろうという気になった。

例え心中では「うおお〜こんなこっ恥ずかしい乙女ポーズ！前世でだってしたことないよ…！」と羞恥に悶え狂っていても。

王子は私のポーズを見て、

「ふ。分かったぞ、寝ろと言うのだろう？」

と笑い、素直に私お手製の葉っぱベッドへと体を横たえた。

よしよし。しっかり眠って回復しなさい。

王子が横になったのを見て、私も自分のベッドへと向かう。もう夕方だからね。

巣穴の中は昼でもそれなりに暗いが、陽が落ちると完全な暗闇となる。私は夜目も多少は利くが、それでも行動するのは昼間のほうが断然に楽だ。

私が自分の葉っぱベッドに転がって尻尾で葉っぱを寄せ集めている

のを王子はボンヤリと眺めながら、不思議そうに呟いた。

「しかしお前は……変わった獣だな。そのような姿も珍しいが、何より私の言葉を理解できるだけの知性を持っているのが不思議だ。獣にもそのような意志があるとは」

（だって前世は人間だもんね。まあ、いかにも外国人！な王子の言葉が理解できるのは自分でも謎だけど）

王子には私の存在が不思議らしいが、私にとってはこの世界の何もかもが不思議だ。

最近こそ不作だが、常にたわわに果実のなる木。

ジャバジャバとドロだらけの体を洗っても汚れない泉。

私の知っているようで知らないような植物や果物、そして動物。

………いかにも異国の王子といった風貌の、この目の前の人間が山に落ちていた理由も。

（まあいっか）

考えても仕方あるまい、と私はアッサリと思考を止めると、大きな欠伸をした。

今日も朝からよく働いた。少し疲れも溜まっているようだ。

私は尻尾をゆるく動かしながら、段々と眠気に誘われていくままに目を閉じた。

第8話 飛んだ獣

「おい！ここにリラの実があるぞ」

（え〜どこどこ？）

タタツと地を蹴り、あっという間に王子のすぐ隣まできた私は王子の指差す先を探す。

「ほら。結構生ってるぞ」

よくよく目を凝らしてみれば、高い高あーい木の枝の上に鎮座するのは、なかなか採るのが難しいリンゴもどき。どうやらリンゴもどきは「リラの実」と呼ばれているようだ。

しかし、あんなに高いところにあるものは、ちょっとやそつでは採れそうにない。

「枝が細いからな。私が登って採ることはできぬが、お前ならば飛んで行けば落とせるだろう？」

そう軽々と当たり前に言われて、私はガックリと肩を落とした。

（そっかぁ……。私の背中の翼を見て、飛べると思ったのね）

私の背中には翼が付いている。だが、この翼はハッキリ言ってお飾り以外の何物でもない。

なにせ生まれてこの方、一回も飛べたことなど無いのだから。

私が看病を始めてから1週間ほど。

王子は目覚ましい回復をみせ、こうして一緒に食料を取りに行けるまでに体調も良くなった。

私たちは相変わらず言葉を交わすことはできないものの（なにせ私は吼えるしかないからね）ボディランゲージのおかげである程度の意思疎通もできるようになり、お互いとても楽に過ごせるようになってきたと思う。

私が毎日果物を採ってくる様子を見ていて、「私も手伝う」と手伝いを申し出てくれたときは本当に嬉しかったものだ。

だが……。

「どうした？俺を乗せて飛べとは言わん、あそこまで飛んで……あの実を落としてくれるだけで良いのだが」

しかし私の事情を知らない王子は、期待に満ちた目で私を見つめてくる。

いちおう「無理無理、飛べない飛べない」と首を振ってみたものの………王子のその目は、熱い。

どうも彼の様子を見ている限り、リラの実云々よりも私が飛んでいる姿を見てみたい、という気持ちのほうが強いようだ。

その視線に私はググツと身を引くが。

（うー、分かったわよお………どうせ飛べないだろうけどやってみるわよお……）

結局折れました。折れましたとも。

いいもんいいもん、飛べない獣の醜態を晒してやるもんー！。

私は「ガフゥ」と一つため息をつく、背中の翼を最大の大きさにしてから、慎重にその羽を広げていく。

隅々にまで力が入っていることを確認するように、ビシッと限界まで広げると、数メートルの大きさになった。

（久々にこんなに翼広げたなあ。ちょっと気持ちいいかも）

ヨッシャ、と気張ってバツバツサと音を立てて翼を動かすと、あたりに風が巻き起こった。

この巨体でなければ軽々と浮かびあがれそうなくらいの風圧なのだが、いかんせん私の体は巨大で、しかも重い。生まれつき背中に翼があるくらいなのだから私は恐らく飛べるはず。しかしどうやったらかこの巨体が浮かび上がるというのか。

「グ、グォ（む、むむう）」

目を閉じ、背中にだけ気持ちを集中させて、私は必死で翼を動かした。

すぐ隣から「神の、御遣い……」とか独り言が聞こえてきた気がしたが、気にせず翼を必死に動かし続けると。

（……………ん？…おお？！！！！）

————ついに、私は飛んでいた。そう、私は……とうとう飛べたのだ！

地面から50cmほど。

＊ ＊ ＊

いじけて地面をひたすら穿り返す私に、王子は懸命に慰めの言葉を懸ける。

「誰にでも失敗はあるものだぞ？それに、一応は飛べたのだ。お前は頑張った」

（飛べたって言っても、どうせ50cmですよーだ。しかもすぐに墜落したし）

ああ、あの光景は王子も忘れえぬ記憶になったに違いない。

私が神々しくも堂々と翼を広げて宙に浮かびあがったあの時。

王子の腰の高さにも満たない高さまで飛んだ後、————ボテツと音を立てて私は落っこちたのだ。

おまけにあんまりビックリしたものだから「ングアヒイン！（んぎゃあ！）」なんて情けない悲鳴付き！ああ恥ずかしい！

腹から着地したせいで私の腹毛も土で汚れてしまうし、もう気分は散々である。

なおもいじける私に王子は「やれやれ」と苦笑すると、空を仰いで一つため息をつき、残念そうに呟いた。

「しかしあのリラの実は諦めなければならぬようだな。飛べぬなら、

さすがにあの位置では採れまい」

その言葉に私は顔を上げた。

確かにちよつと高いが、あれくらい諦めなくても私なら何とかなる。私を普通の獣と一緒にしては困るな、フフフ。空は飛べないけど、曲芸なら任せとけ！

私はムックリと立ち上がると、おもむろに近くの小石を肉球の間に挟んだ。

「……おい？」

王子が訝しげに私を見ているが、それに流し目（分からないだろうが）をくれてやると、私は目にも止まらぬ速さで腕を振りかぶった。

—————ヒュッ————…ボトッ—————

（うむ！ちよつと遠かったからキツかったけど、コントロールは今日も抜群です！）

心なしか命中率がグングン上がっている気がする。

最近では、もはやほぼ百発百中である。

生活がかかっていると人間なんでもできるもんだ。あ、獣だったっけ。

目の前に落下してきたリラの実に、王子は口をポカンと開けて固まっている。

よほど私の投球に驚いたらしい。

それに大袈裟だなーと思いつつ、次々と小石を投げてはヒットさせていく。

ポトポトと地面に落ちてくるリラの実に、王子は我に返ったのだらう。王子は「くっ…」と小さなくぐもった笑い声を洩らすと、次第に大きな声で笑い出した。

「ハハハハハ！！本当にお前は、規格外な獣だな！」

その言葉には皮肉っぽいものは混じっておらず、ただ純粹にそう思っているようだったので、私も気を良くして「グオ（まあね）」と自慢げに仁王立ちしてみた。

出会ってから1週間ちよつと。

獣と人間である私たちも、随分打ちとけたもんだ。

第9話 泉へ

その日は泉と一緒に行った。

王子が「ちよつと臭ってきたな」と自分自身の体をクンクン嗅いでいたためだ。

私はそんなに気にならなかったけど、人間の王子にとってはとても気になっていたらしい。

「お前が食料を採りに行っている間に、その水たまりの水を掬って体を拭ったりはしていたんだが。どうにも……臭さが限界を迎えてしまつてな」

そう苦笑いしながら言われては、なにはともあれ泉に案内するしかない。

人間一人分の飲み水程度であれば巣穴の脇にある水たまりでも良かったのだが、体を洗うとなれば話は別だ。

王子の体調もだいぶ回復しているようだし、そろそろ水浴びくらいしても大丈夫だろう。

「グウガルウウウ（こっちだよー）」

とスキップしながら歩いていく私に「嬉しそうだな」と笑って、王子も後を付いてくる。

私も王子の世話を始めて以来、久々の水浴びなのだ。そりゃあ、心も浮き立つってもんだ。

この頃は王子も私に慣れてきたので、私も安心して野太い声を出すことができていた。種族を超えた友情って美しいね！

泉に着くと、私は躊躇いもせずに泉に向かってジャブーーンとダ

イビングをかました。

実はダイビングするのはいつものことなんだけど、王子は突然の私の行動に随分驚いたみたいだ。

「うわっ、お前いきなり…っ水しぶきが…っコラ！…ッ」

バッシャンバッシャン泳いでみせると、王子は「分かった分かった」と笑いながら自らも服を脱ぎ始めた。

王子が最初に着ていたローブは、王子を拾ったときにうっかり私が川へ流してしまったために無い。

今の王子の恰好は複雑な模様の入ったシャツと、紺色をさらに濃くしたような色のズボン、そして革のブーツだけだ。

王子はさっさとシャツを脱ぎ捨て、その引き締まった胸筋を露わにすると、そのまま下半身を包むズボンに手をかける。

（んんんん?!）

ベルトをガチャガチャし始めた様子を見て、私は水しぶきを立てていた腕を止めた。

（こ、これは………38歳の乙女としては、ピンチなのではないでしょうか……!）

裸の女と男が一人ずつ。

周りには人っ子ひとりおらず。

それこそ、ここでピンクな出来事がいつ始まってもおかしくない………そんな、状況。

———なあってね。

私の今生は獣ですから、イヤンアハンなことなど欠片も起きるわけがないというわけです。チッ！

とはいうものの、正直、前世の意識がある私には刺激が強すぎる。慌てて泉の端っこまで泳いで行って背を向けたが、王子の動きは思ったよりも素早かった。その素早さを他のことに活かせばいいのに、と思うくらいに素早かった。

いつの間にか近くにきたらしい王子の引き締まった腕が、私の後ろから肩越しにそっと伸びてきて。

「どうした……。急に大人しくなったな？」

咄嗟に振り返って。

私は、カチンコチンに固まってしまった。

（お、お、お、己はなんというお色気を……！！！）

王子の全身は————太陽の光を受け、水に濡れた肌が艶めかしい輝きを放っていた。

筋肉がバランスよく全身に付いていて、まるで彫像のような体型だ。きつと鍛錬で得た肉体なのだろう、私の顔に触れた手に目を落とせば、その手には剣ダコらしきものがシッカリとついていた。

それを見て、私は一瞬胸をキュンとさせる。

乙女は、生まれ変わっても乙女らしい。

こういう見た目キラキラ、中身は努力してます、みたいな人に前世の私はまさに弱かった……！

そして再び王子の体に目を戻せば、麗しく括れた腰が目に入り。そ

のまま視線を落としていくと、惜しげもなく晒されたその下半身の中央にはご立派な魔王が鎮座————ってコラア！隠せ！おまえ、隠せ！男として、隠せエエエエエ！！う、ううう——鼻血出たらどうすんのよおお！！

せめて全身水に入っていればいいものを、この辺りは水深が浅いのだ。見えるのだ。思わず、み、見てしまうじゃないかああああ——

（あああ私は獣、ケモノ、アニマルなの、だから見ても大丈夫、だいじょ———）

「おい。お前、挙動不審だぞ？行動がおかしいのはいつもの事だが」と言われて「なんだと———?!」と言い返すために思わず王子に向きなおるが。

（やっぱり大丈夫じゃないよう———!!）やっぱり見たらマズイって！いくら獣でもマナーは大切でしょ！）

私は慌てて下を向いた。

この全身を覆う白い毛のせいで肌の色が分からないのが幸いしたが、もし人間の姿だったら全身真っ赤に染まっていただろうな、とチラリと頭の隅で思った。

慌てふためく私を見て、分かってるんだか分かってないんだか、王子は「フ……」と笑うとようやく私から離れて目的であった水浴びを開始してくれた。

去り際に「そんなに俺はイイ男か？」という戯言を私の耳に残して。

くそう、
からかったな？！

第10話 魚獲りは得意なほうなんです

しかし、アレだね。

王子の着替えが無いって、マズイですね。

今、王子は葉っぱ王子です。

泉へ行って水浴びをした後、王子は臭くなった衣服も水でジャブジャブと洗ってしまったのだ。

さすがに私が近くに居れば止めていたかもしれないが、王子の生まれたままの姿に興奮：いやいや、焦っていた私は少し離れたところで遠巻きに見ていたため、どうしても止めるのが間に合わなかった。結果、着替えの無い王子は、素っ裸で山を歩き回ることになった。

そ、それでも努力はしたんだよ？！

私も、股間の凶器を晒したまま目の前をチラチラされなくなかったから必死だったし。

無駄に器用な獣だからね？この山で一番大きな葉っぱを持ってきて、爪で葉っぱに小さな穴を開けて。その穴に舌を駆使して鳶を通し。

簡易紐パン？もどきを作って王子に献上させていただきましたとも……！

紐パンといっても、ただお尻と股間を覆い隠すだけの代物なので風が吹けば「イヤーン」な事態が起こるが、その時は視線を逸らすことにする。とりあえず常に目に入る状況だけは防ぎたい。

私に葉っぱパンツを渡された王子は物凄く驚いて「本当に器用なん

だな……」と言っていたけれども、そこまでして「股間を隠せ」とアピールする私がおかしかったのだろう。
わざわざ装着した後に「どうだ？」と言って見せつけてくるあたり、この男も大概意地が悪い。

その後、洗濯物を私の翼に引っ掛けて干している（本当に失礼な男だ）葉っぱ王子を連れて、私は今日の食料を探しに出ることにした。思いがけず泉に行ってしまったけれども、まだ今日の食料確保は終わっていないのだ。陽が落ちるまでしばらく時間はあるが、食べ物 は早めに確保しておきたい。ただでさえ、最近は採れる食料も減ってしまったのだから。

本日の採集ポイントは、せっかく近くまで来たのだから、と王子と初めて出会った場所まで行くことにした。夕飯はもちろん、野苺だ。

「……………」

この辺りの景色には見覚えでもあるのか、王子の顔が少し険しい。あ、今は葉っぱ王子だったか。——葉っぱ王子の顔は、険しい。

（この場所、覚えてるのかな）

やがて王子を拾った現場に着くと、私は王子の顔を見上げた。

王子の目は何か遠いものを見るように眇められているが、その表情から何かを読み取ることはできそうにない。

「…グォ？（…王子？）」

遠慮がちに声をかけると、王子はハツとした顔をして私に笑顔を向

けた。

「なんだ？」

大丈夫？と声に出そうとして……、やっぱり止めた。だって、とても大丈夫そうには見えなかったから。……もつとも、私が何を話したところで王子には分からないんだけど、さ。

私は言葉を発する代わりにペロリと王子の手を舐めた。

心配してるんだよ、って気持ちだけ伝わるというなと思って。

そんな私の気持ちは彼にしっかりと伝わったのか、王子は私の頭にそっと手をやると頭を優しく撫でてくれた。

（は、初撫で！！）

一緒に暮らしてはいるが、王子に撫でてもらったのは実はこれが初めてだ。

私は少しの間感動に打ち震えていた。

それは想像していたより遥かに気持ちいい感覚で、私は無意識に「もっと、もっと」と頭を王子の腰に擦りつけていた。

そして、そんな自分の行動に気がついたのは王子の最後の一葉が地面に落ちた瞬間で、我に返った私は全力で木陰に逃げざるを得なかった。その股間の魔王、早く隠してください。

そのまま私たちは野苺ポイントへ行き、新しくなっていた実を摘んで食べた。

今回はあまり実がなっておらず一食分にも満たなかったが、私たちの舌は十分に満足させてくれた。やっぱり苺っていいよね！あー高

級フルーツパーラーの苺パフェが懐かしい。

「摘んで帰るほど、たくさんはなかったな」

「ガオウウ（そうだねえ）」

まだ空いている胃袋を抑え、私と王子は川べりでボンヤリしていた。今は何とか食い繋いでいるが、いずれは食べるものが全く無くなる日がくるのかもしれない。

そんな日がきたら、私はどうしたらいいんだろう。

少し眉を顰めて、私は項垂れた。

王子もお腹が減っているようだが、私も相当に減っている。体の大きさが違うのだ、食べる量にも違いがある。もう少し何か食べるものを見つけて帰りたいところだが、そろそろ日暮れが迫って来ていた。

そんなとき、王子がふと気がついたように私に問いかけてきた。

「そういえば、お前は魚は獲れないのか？」

（へ？）

私はキョトンとした顔で王子を見る。

魚を獲るくらいは、私にもできる。本能が助けてくれているのだろうか。間合いの詰め方、一瞬の腕の出し方、魚の弾き飛ばし方、その全てが感覚的に分かるのだ。

ただ、生魚のままでは食べられないだけで。

ジェスチャーでそのことを伝えようとしてみたが、うまく伝えられそうにない。

だから、私は実際に獲って見せることにした。

捕えた魚を王子に渡して、「どうやって食べるんだ？」と言われたら「分からない」とばかりに首を振ってやれば理解してくれるかもしれない。

魚を捕まえること自体は大した苦では無いので、私はさっそく川へと這入って行った。

この辺りの川はとても水が透き通っているのですぐに獲物を見つけ
ることは出来た。

ソロリソロリと水の中を進み、川を中心付近でジッと体を岩のよう
にして固める。

(……………今だっ！)

一瞬のうちに腕を水中へ突っこみ、まるで鮭を獲る熊のごとく川べ
りへペイッと魚を放り投げた。

宙を舞う魚が、キラキラとした放物線を描く。

私の読み通りに魚がキッチリ王子の目の前へと着地を果たすと、拍
手の音が聞こえてきた。

「ハハ！さすがだな」

私の雄姿に王子が歓声を上げてくれたのに気を良くし、私はそのま
まパシッベシッと魚を次々に川べりへ向かって吹っ飛ばす。

気がつけば、ほんの5分ほどで捕まえた魚は20匹になっていた。

「……………で？」

(で?と言われても:)

私は、たくさんの魚を前にションボリとしている。

調子に乗って獲ったはいいものの、ちよつと獲りすぎたかもしれない。おまけに、生のままでは食べることもできないので、私は無駄な殺生をしてしまったことになる。

(ああ魚さん、ゴメンナサイ!私だって食べたいけど食べられないのよ)

困った表情(たぶん分からないだろうが)を作って、私は無言で王子を見上げる。

見上げられた王子は、どうやら私がなぜ困っているのかが分からないらしい。しきりに続きを促してくる。

続きといったら魚を焼くことだろうが、いかんせん、肝心の火が無い。

それをどうやって王子に伝えたらいいかなあと悩んでいると、王子は私に衝撃的発言をしてのけた。

「お前は火が吐けるだろう?…焼かないのか?」

は?

第11話 火を吐く

王子曰く、私はどうやら「白き御遣い」と呼ばれる神聖な獣らしい。やたらめったらいる獣ではないので王子も初めて見たそうだが、100年に一度、見るか見ないか…といったくらいに希少度が高いそうだ。

その大きな特徴は、白い体軀をしていること。大きな翼をもっていること。そして火を吐くこと。

王子は目を覚ましたばかりの時のことを「あまりにも汚かったから白毛だとは分からなかったな……。あれでは白き御遣いには見えまい」と語って私の乙女心をグッサリと刺してくれたが、その言葉に傷ついてションボリしている私に慌てたのか、「あ、安心しろ。今はそれらしく見えるぞ?」と微妙なフォローを入れてくれた。そのフォロー、あんまり嬉しくない。

リラの実を取ろうとしたときに大きく翼を広げた私の姿を見て、王子はようやく私が「白き御遣いである」と気がついたんだそうだ。だから王子は私が魚を捕まえた後、当然に「口から火を吐いて魚を焼くだろう」と考えて、待っていたんだね。

「……………知らなかったのか?」

不思議そうな顔をしている王子に、私は驚きのあまり目を見開いた顔のまま、頭を上下に思いつきり振った。

(何もかも今初めて知ったんですけど!)

まさか、自分がそんな絶滅危惧種並みに珍しい生き物だったなんて!

しかもそれを第三者である王子から教えられるとは、我ながら情けない……。

しかしそれが本当であれば、私は火を吐ける生き物なのだ。

そんなこと今まで思いもしなかったから試したことすらなかったが、火があれば魚も焼けるし、リンゴそっくりのリラの実だって「焼きリラの実」にできる。其れすなわち、食生活の向上！

翼はあっても最高記録50cmしか飛べない「みそっかす御遣い」なので、いまいち不安が残るが、何事も挑戦が大切である。

私は王子に「下がってー」と後ろへ下がるように手を振った。さっそく焼き魚を作ってみるのだ。

さすがに土の上で焼くのは汚いので、ちょっと水で流してから綺麗な岩の上に魚を乗せた。

ちなみに軽くチョップを入れて魚は絶命済み。魚が暴れて岩から落っこちることが無いので、安心して火を吐くことに集中できる。

いやー悪いね、魚さん。世の中、弱肉強食ですからカンベンカンベン。その代わり、この逞しい顎と歯で、ちゃんと骨までバッキバキに食べて差し上げますとも。

私は喉の奥をグルグルグル……と鳴らし、炎を吐くっぽい気合を入れた。

実際に炎を吐いたことなどないので「どんな気合だ、それは」とか思わないでもないが、そこはまあ、ノリです。ノリ。

途中で呼吸が尽きないように、息を思いっきり吸い込み。

そして、魚に向かって腹の底から溜めこんだ息を吐き出した！

「ウグルウオオオオオオオオオオ!!」

すると、物凄い絶叫とともに私の口からは渦巻くような業火が――

……。

……あれ?……出ないね。

何となく王子を振り返ってみる。

王子も「あれ?」と思ったらしい。首をかしげて不思議そうな顔をしているが、とりあえず「頑張れ」と親指を立てられたので、私はもう一回お魚さんに向きあった。
そして再びの挑戦で。

「ウグルウオオオオオオオオオオ!!」

……。

……。

どうやら「みそっかす御遣い」説がいよいよ濃厚になってきたようだ。

考えてみれば、私は空も「それって空と言えるのか?」と聞きたくなるほど低い、50cmくらいの超低空飛行しかできないのだ。火だって、マッチ一本程度の火が出れば上出来なくらいなのかもしれ

ない。

何はともあれ、火が無いので今晚の夕飯に焼き魚は諦めるしかない。私はションボリ顔で王子のほうを向いて、「駄目だったよ…」とため息をついた。

すると王子から「うわっ」と小さな悲鳴が上がったので「え？」と視線を上げるとそこには————炎で腰の葉っぱを燃やされつつある王子の姿があった。

どうやら、今のため息で私の口から火が生まれらしい。

……。

……。

やったね!!!

その日の夕ご飯は、生まれ変わってからは初めての「焼き魚」ご飯となった。

身がほどよく引き締まった魚は、久々に食べたせいか前世で食べたものよりも美味しく感じられて思わずたくさん食べてしまいそうになったが、私は食欲をググツと堪えると、横で黙々と食事を進める王子に自分の焼き魚の一部を謹んで進呈させていただいた。

……も、もう王子に向かって火を吐きません、ごめんなさい！

ちなみに王子はその晩、葉っぱ王子からただの王子へと戻った。

私の熾した焚火で、昼間洗った衣服を乾かしたのだ。
それに。

………葉っぱは、燃えちゃったしね。王子の魔王様が無事でいらして良かったです、ハイ。

第12話 聖地（前書き）

※外部からの視点となります。

第12話 聖地

———豊饒なる地、アムネス山。

そこは神気の恩恵を多く受けた山であり、また神の遣いが降り立つと伝えられる聖地である。

アムネス山はこの国にも属さない。

多くの資源を有するその大地は近隣諸国のみならず遠方の国すら欲しがるほどであったが、各国で強く信仰される全知全能の神・アムル神の聖地ともなれば、迂闊に手だしを出来る場所ではなかった。よしんば神を恐れぬ心で以って侵略しようと考えたにしても、神殿がそれを許すことはなく、また強引にアムネス山を手にすることはアムル神を信仰する自国民の心をも離れさせる結果となる。

だからこそアムネス山はその豊かさにも関わらず、誰の手にも堕ちることがないままに、遙か昔より変わらぬ姿を保ち続けているのだった。

そのアムネス山から最も近くにある町・リザンシェは、聖地の麓という土地柄から、神殿の息が強くかかった町である。

この町はアムネス山の北方に位置するフィヨルド国の領内ではあったが、この町に限って言えば王国兵よりも神官のほうが断然に立場が強い。それは、神気を多く含む土地に於いて神官の果たす役目がいかに大きいことでもあった。

神気には、あらゆる生物の持つ能力を促進させる力がある。

例えば、腕力。咄嗟の攻撃を避ける反射能力。或いは、怪我をした際の自然治癒能力。神気に触れた人間はあらゆる能力を増大することができた。

しかし、神気というものは人間にとって毒ともなる。

微弱なものであれば身体能力を強化するだけにとどまるが、強すぎる神気は逆に人体を衰弱させ、最悪の場合死に至ることさえあるのだ。

そんな神気に干渉しその力を弱めることができるのが、神官であった。

アムル神に一生を捧げ祈りに満ちた日々を過ごす彼らは、病に苦しむ人間へは治癒能力を高めるために神気を受けやすくしたり、あるいは強すぎる神気への抵抗力を与えたりする業を持っていた。

そのため神官と言うものはどの町でも重用される存在であったが、とりわけ神気を多く内包するアムネス山麓の町ともなれば、その立場が強くなるのは自明の理とも言えた。

「今日もアムネス山は、美しいですね」

そう独り呟いて山を仰ぎみる青年。

リザンシェの神殿で暮らすこの青年もまた、そんな神官のひとりであった。

青年は日課である朝の祈りを神殿で済ませると、いつものように町外れの森へと歩いて行く。

アムネス山へと続くこの「神気の森」は、このあたりでも最も神気の濃い場所である。そのため、毎日現地に赴いてのキュール（神気中和）が必要となるのだ。

「ワীগ神官！今日もお勤めですかい？」

彼が町を歩くと、たいてい誰かがこうして声をかけてくる。

それは「神官」という立場もさることながら、穏やかな性格を持つワグ自身に対して町の住人たちが好意を抱いているから、というのが一番大きな理由だろう。

事実、神官という立場を笠にきて横柄な態度に出る人間も、一部ではあるがこの町にもいる。

そういった神官は町の住民からすれば「敬わなければならないがなるべく関わりあいたくない相手」であり、その点ワグのような神官はとても親しみやすく頼りになる神官であった。

「キュールをしておかないと、神様のお力は私たちには強すぎますからねえ」

ワグはにっこりと笑って答えると、「それじゃあまた」と手を振って先へと進む。

本来であれば、森への「キュール」は神殿の神官たちが日替わりで行うものである。

しかし、神官でさえ辛く感じるほどの神気を放つ森へ赴くことを皆が厭っているうちに、いつの間にか「神気の森はワグの担当」ということになっていたのだ。

ワグは森へ着くと、さっそくキュールを施すための準備を整える。神気を中和するには、対象に触れ、神への祈りを捧げなくてはならない。

しかし対象が人間であればそれだけでキュールは事足りるが、「神気の森」自体にキュールをかけるとなると少しばかり方法が異なる。

対象に触れて祈りを捧げるという行為は同じだが、森という広範囲

にキュールするには森の一部——つまり森の木の枝、又は川の水などに一度キュールをかけ、そしてキュールをかけた「それ」を森へと返した後、今度は森全体へとキュールをかける必要があるのだ。

木の枝を無闇に折ることを善しとしないワグが森の一部としてキュールに使っているのは、いつも決まって「神気の森」の中を流れる川の水であった。

もちろんこの日も、ワグはいつもと同じように川の水を汲みに森の中へと足を踏み入れたのだが。

「……おや？」

見慣れないものが川を流れているのを目に留め、ワグは首をかしげた。

この川の上流にあるのは、聖地・アムネス山である。

その聖地から物が流れてくるということ自体、おかしい話だ。

ワグは上流から流れてきた物体を不思議に思いながらも、とりあえず引き上げてみることにした。

水を含んで重くなった物体を引き上げることは普段力仕事をしないワグにとって大変なものであったが、それでも「よいせ！」と掛け声をかけつつ、なんとか引き上げる。

引き上げたその物体を見ると、それは布であった。
それも——。

「ローブ、ですか。なんでまた、ローブが聖地から……」

広げてみれば、それはなかなか上質な素材でできたローブであっ

た。

素人目に見ても、この町でも余程のお金持ちか、あるいはそれ以上の立場を持つ人間でないと持ち得ないような上等な逸品である。

聖地はどのような人間であれ、決して侵してはならない神聖なる場所。

そんな場所から、明らかに人間にいる痕跡が流れてきたのだ。しかもこの品を見る限り、とても「誤って迷い込んだ一般人」とも思えない。

これは神殿のみならず、各国を揺るがす重大な問題であるように思われた。

ワグは自らの拾い上げたロープを握りしめたまま、アムネス山を仰ぐ。

「……………」

ここからアムネス山の変化を読み取ることは出来ない。

しかしアムネス山を見上げる彼の表情には、これから起こるであろう事への不安、そして焦燥が浮かんでいたのだった。

第13話 臆病な獣

王子と暮らし始めて3週間が経った。

四六時中行動を共にしているのだ、余程気が合わない限りそろそろストレスが溜まりそうなものだが、私たちは意外なほど良好な関係を築いている。

やっぱり、種族が違うっていうのが大きいのかもね。

王子の場合、私のことをペット感覚に思っている、っていうのもあるかもしれない。ほら、私って白くてフワフワで愛嬌があるから！ほんのちよつとばかり獰猛そうに見えるだけで。

私が「白き御遣い」と呼ばれる存在だと判明してから、私たちの何かが変わったかと言えば————大した変化はなかった。

「白き御遣い」だなんて大層な呼び名だけど、王子は私を特段敬うような仕草をするわけでもないし、それに私自身、「神聖な獣だ」と言われてもピンとこない。

今まで通り、この山で生きていくだけだ。

あ、食生活に関してはかなり変わったね！

私が火を吐けるようになったことで食材の中に「魚」という選択肢が増えたのが大きかった。

ひしひしと感じていた食糧危機に、魚という救世主の到来である！私たちは果物と魚をバランス良く食べることに、舌に優しく栄養素にも優しく、ついでに山にも優しい食事を得ることができた。……さすがに気になっていたんだよねえ、私たちが山中の果物を採ることで、他の動物たちが食べる分まで食べちゃってる気がして。

あとは、食べれる物を探して山を彷徨う手間がなくなったおかげで、自由に動ける時間が増えたかな。

今までは食い繋いでいくだけでいいっぱいだったけど、今はゆっくりできる時間がそこそこにある。

この時間を使って、私は空を飛ぶ練習や、火を吐く練習をしていた。教師は、葉っぱの似合うこの色男。本名は知らないの、仮称・王子！

ハハハ、こんなことの中で思っているなんて王子に知られたら半殺しですよ。でもどうせ聞こえないから言いたい放題言うのであります！

教師といっても王子がすることは実際ほとんどない。私が飛ぶことに集中して目を閉じているときに

「今は私の背丈ほどの高さまで飛んでいるぞ！」

と教えてくれたり、あるいは火を吐く練習をしているときに

「もっと力を抜け！私の股間に向かって火を吐いた時の感覚を思い出すといい」

と若干背筋が冷たくなるアドバイスしてくれたりするくらいだ。……あの時のこと、まだ怒ってるのか……しつこい男め。

それでも一人で練習するよりは王子がいてくれたほうが断然にいいので、私は練習をしたくなると必ず王子に「ガーーウウウグウ（ねー手伝ってー）」と背中に頭を擦り付けておねだりをする。

そうすると、王子は目を細めるようにして笑い、「練習したいんだな？」と一緒に外へ出てくれるのだ。

気がつけば、私の行動はすっかり人慣れしたペット状態。獣として

のプライドは、最早ミジンコほどもない。

これだけ一緒に暮らしていると「二人のルール」らしきものもだいぶ出来あがってきていて、最近では私が何かを伝えたいときには決まったポーズをとるようになっていた。

例えば、両手を口にやってモグモグすると「食料を取りに行こう」の合図。

四足を同時にジャンプさせると「水浴びに行こう」の合図。

背中にスリスリすると「練習したいから広いところへ行こう」の合図。

そして————両掌を合わせて左頬の下にあて、小首をかしげると「おやすみなさい」の合図。

いろんな合図の中でも「おやすみなさい」だけは特別だ。

私がこのポーズをすると、王子は必ず優しく微笑んで頭を撫でてくれるのだ。

私たちが打ち解けるキッカケとなった「おやすみなさい」のポーズは、私だけでなく王子の胸の中でも特別な想いを持っているようで、私はそれがとても嬉しかった。

でも、ちゃんと分かってる。

私は獣で、王子は人間だ。

いつまでも一緒にはいられないと、毎日を過ごしながらも頭のどこかでは理解している。

それでも。

出来る限り長く、私は王子と一緒にいたい。

もう、一人ぼっちの生活になんて………戻れない。

私は王子が大好きだ。

言葉が通じなくなつて、種族が違つたつて、大好きだ。

王子と出会つて私はとても幸せな獣になつたと同時に、とても――
――臆病な獣になつた。

第14話 異変

朝。

いつも通りの時間に目を覚ました私は、しかしすぐに

（空気が、おかしい）

と感じた。

葉っぱベッドから飛び起きるようにして出ると、急いで巣穴の入り口まで駆けていく。

私の全身の毛を撫でるように吹き抜けていく風は、まったくいつも通りだ。

でも、分かる。

何かの異変がこの山で起きている。

「どうした。何かあったのか」

遅ればせながら王子も私の後を追ってきて、私と並んで外を眺めた。いつもであればこの時間はのんびりと毛繕いに勤しんでいる私が、これだけ慌てているのだ。一見何ら変化があるように見えない景色ではあったが、王子も「何かあるのか」と察して、周囲への警戒を強めた。

私は王子の問いには答えずに、鼻や耳をピクピクと細かに動かしながら気配を探る。

何か……そう、何かが起こっているはずだ。

そうでなければ、こんなにも気になるはずがない。

緊張からか私の毛はボワツと膨らみ、私はその毛の一本一本に触れ

る風からも細かな情報を拾っていくように全身の間隔を研ぎ澄ました。

（何が起きているの）

どんなに遠くの音でも、きっと私なら聞こえるだろうという確信があった。

私はほんの僅かの変化さえも見逃さないように、慎重に精神を集中させていく。

――：：：：：：：：：――

――：：：：：：：：：――

（？）

――い……だ……！……――

（！！）

「ウガァァ！！（声！！）」

「何か分かったのか」

私は王子のほうを振り向くと、首をブンブンと上下に振った。

どういうわけか分からないが、今この山には人間が、しかも複数人入ってきているようだ。

「ガァグルルウウ！グガッオウ（人間がいるよ！しかも何人も）」

ああ、所詮は獣。

私の口からの言葉では、王子は首をかしげることしかできないのが切ない。

だが何か異変があったことだけは、理解してくれたようだ。

「私にはお前の言葉は分からぬ。だが、何かあったのだろうか？ 私が様子を見てくる。そこへ連れて行け」

王子はそう言い放つと、毛を逆立てていた私の背中を撫で、それからおもむろに跨った。

逆立っていた毛の上に急に跨られて「グォヒイン！」と悲鳴をあげてしまったが、王子にヨシヨシと頭を撫でられて思わずこんな状況だと言うのにマツタリしてしまう。

王子に頭を撫でられるの、気持ちいいんだよね。

私は王子を背に乘せ、ゆっくりと翼を大きく開いていく。

バツサバツサと羽ばたかせる動きは、飛べなかった頃と違って落ち着きすら感じられた。空を飛ぶには、やたらと羽ばたくよりも上手く翼を動かしたりバランスを取るほうが重要なのだ。

そう。

最近は練習の甲斐あったか、王子を乗せて空を飛べるまでに私の飛行能力は上達しているのです！

最高高度50cm？ハハン、いつの話ですか！

今の私は、そう…まるで大空を駆けるペガサスのごとく…！

……。

ちよつと言い過ぎたかな……。

3階建てビルの屋上程度の高さまでは飛べるようになりました。エヘン。

もちろん鞍や綱なんかないので（どちらにしても苦しいから装着はさせないけど）、王子は落ちないように自分でバランスを取るしかない。

掴まれそうなところといったら私のフワフワの白毛くらいだけど、そこを掴まれたことは不思議なことに一回もなかった。

「掴まれたら痛いだろう」という配慮のためか、あるいは王子のバランス感覚がとても良いためか。

それは分からなかったけど、初めて人を乗せて飛ぶ私の騎乗者として、王子はとても優秀な人材であることは間違いないだろう。

王子を乗せて、さきほど微かに声が聞こえてきた方向へ向かう。

あそこから声が聞こえたときには「まさか……」とは思ったが、どうやら私の予想は当たってしまったようだ。

声の主の人間たちがいる場所は、川沿いの野苺ポイント付近。

奇しくも、倒れていた王子を私が拾った——————思い出の場所だった。

第15話 王子は王子

その場所にはたくさんの人間がいた。

生まれ変わってから初めて見た人間が王子だったが、どうやらこのあたりの人間は日本みたいに黒髪の人間があまりいないようだ。

大体が金色。あるいは栗色なのだろう。

逆に、目の色は随分と種類が豊富なようだ。

緑やら紫やら赤やら。

ちなみに王子は青色です。金髪は金髪でも陽の光に透けるような金髪と、抜けるような青空の色をした目を持つ美形なので、まさに「王子」というニックネームがピッタリでしょ。我ながら素晴らしいニックネームを付けてあげたもんだと惚れ惚れしてしまうね！

急に山に現れた見知らぬ人間たち。

その彼らの前にいきなり出ていくのはちょっと怖い気がしたけど、私は高度を保ったままに人間たちに近づいて行くことにした。

もしも山を荒らす目的でやってきたなら、いかにも獰猛な肉食獣に見える私が現れれば、彼らは怯えて逃げていくかもしれないし。

それに、王子が言うところの「白き御遣い」である私が空を飛んでいるところを彼らに見せつけければ、畏敬の念を感じて山から出て行ってくれるかもしれない、と思ったのもある。

そんな思惑からそのまま人間たちのところへ飛んで行こうとする私に、王子は不思議になるくらい口を挟むことはなかった。

私が行くことは、跨ってる王子も彼らの前で姿を見せるってことになるんだけど。

（もしかしてアレか！俺は「ジャングルの王者」ならぬ「お山の王者」だぞーとか見せびらかすつもりか！）

王子は意外とロマンの分かる男かもしれない。ちよつと親近感。

私も前世の時からそういうノリは大好きだ。もう少し若ければコスプレでもしてキャラクターになりきるのも吝かでもなかったほどに。まあさすがにね？38歳で10歳くらいの可愛いキャラクターの格好とか、ナイナイナイ……。軽く羞恥刑ですよ！

（ヨーシ、任せとけ！私が神々しい「白き御遣い」を演出してあげるから、王子はせいぜい「王者」っぽいムードを醸し出しておくのよ？）

私は鼻からフンツと気合いの鼻息を吹き出すと、少しばかりウキウキとしつつ人間たちの頭上へ向かって飛んで行った。

私の背中に跨る王子の顔が、とても陰しいものだったと気付きもしないで。

最初に私に気がついたのはどの人間だったか。

一人が私を指さして驚愕に満ちた顔を見ると、それに気がついた人間たちが次々に私の姿をその目に認め、身を強張らせた。

「ま、まさか……白き、御遣い………！」

やー王子の言うことを疑うわけじゃないけどね？

本当に私って「白き御遣い」ってアニマルなんだねって思ったよ！その名前からして神様から派遣された存在っぽいけど…、私、特に神様に会ったりしたことないんだけどなあ。こんな俗物っぽいのが御遣いで本当に良かったんでしょか、神様。

人間たちはしばらく固まっていたが、その中の一人が私の背に目を向けると突然——

「王子殿下?!」

と叫び声をあげた。

その声に、私の背に感じる、僅かな身動き。人間たちの声に、王子が動揺しているのが伝わってきた。

（王子の知ってる人なの？ていうか「王子」って…私の付けたニックネームのことじゃ、ないよね？）

王子も動揺しているようだが、私も混乱していた。

訳が分からない。

そりゃ、王子の素性も知らないままに一緒に暮らしてきたけれど、まさか本物の「王子」様だったなんて…思わなくても、無理はないでしょ？

（王子。王子、どう思ってるの。彼らの言うことは、本当なの？）

王子の顔が見たいと思った。

だけど私の背に乗ったままの王子の顔を見ることは出来ないし、彼自身沈黙を貫いているので、その胸中を察することもできそうにない。

私はもどかしい思いを感じながら、眼下の人間たちの様子を窺った。

「あ、あああ……やはり王子であらせられる！よくぞ……よくぞ生きて……ッッ！！」

突然のことに驚く私を尻目に、とうとう人間たちはヨヨヨ……と泣き出してしまった。

「王子殿下」と呼びかけたおじいさんを先頭に、中年のおじさんたちが数人、まだ若々しい青年たちが10人とちよつと。

皆それなりの装備を整えているらしく甲冑姿だったけど、おじさんたちと青年たちの中の2〜3人は甲冑ではなくてローブを羽織っていた。

そのうち咽び泣いているのは甲冑姿の人たちだけで、ローブの人たちは地に手をついた状態でずっとブツブツ何かを呟き続けている。

(……せ、精神的に危ない人たちの集まりじゃないよね……?)

ちよつと微妙な気持ちになりつつ、私は背中の「王子」を窺う。

もしも彼らが本当に王子の知り合いなら、王子を返してあげなくてはならないだろう。

私は、獣。

この山で一人で暮らしてきた獣。

たとえ「白き御遣い」と呼ばれる希少動物だとしても、「王子様」と一緒に暮らせない存在だ。

私は自分の心に踏ん切りをつけると、静かに地面へと降り立った。後ろ足をそつと折り曲げてその場に伏せると、王子に降りるよう促す。

（降りなよ。王子の世界へ帰るといいよ）

少し寂しいが、仕方ない。

いつまでも人間と獣がいつしよに暮らしていけるなんて、私だっと思ってたわけじゃない。……別れるのもう少し先のことかな、とは思ってたけどさ。

王子は私に促されるまま、ゆっくりと地面に足を付けた。

それを見て人間たちが慌てて近づいてこようとしたりけど、私に恐れをなしたのか、一定の距離を置いてそれ以上近寄ってはこなかった。

「……………謀った者は、確保したのか」

ようやく口を開いたと思ったら、王子の発した言葉は、しかし私には不可解なものだった。

（謀った？）

謀ったとはどういうことだろう。

もしかして————王子が山の中で倒れていたことと何か拘わりがあるのだろうか。

首をかしげる私だったが、しかし人間たちにはその意図するものが分かったのだろう。

おじいさんが「はい。……殿下の予想通りの方かと」と答えると、皆一様に痛ましそうな表情を作っていた。

第16話 サヨナラの時

彼らの話を聞いていたところ、どうやら王子は誰かに「謀られて」この山に来たらしい。

来たっていうか、連れてこられたんだね。

一番派手に泣いていたおじいさんが言うには、この山には「神気」とかいюものがたくさんあるらしくて。

王子があゆ川べりで弱っていたのは、その神気に当てられたからじゃないかという話だった。

でも、それはおかしい話だとも思う。

私はここで半年以上も過ごしているけれど具合が悪くなったことなんか（腹ペコを除いて）1回もなかったし、それに王子だって私が拾ってからは毎日生き生きと過ごしていたものだ。変化らしい変化と言えは、王子が若干野生的になったことくらいだ。

その「神気」とかいюものがどういふものかは分からないが、「神気」のせいで倒れた人間がこんなにも元気でいられるものなんだろうか。

私の疑問に対する答えは、ハッスルして王子の無事を喜んでいるおじいさんからもたらされた。

「しかし驚きました！殿下が御遣い様と一緒にいらしたとは……私どもは半ば覚悟を決めてこの山に参りましたが、まさかこのような僥倖に巡り合えるとは思いませんでしたぞ！殿下は御遣い様に守られておいでだったのですな」

（私、何かから守ってたっけ？）

あまり守った自覚はないのだが、どうやら王子が「神気」とやらのせいで倒れずにいられたのは私が一緒にいたおかげ、ということらしい。

そういえばうつかり忘れがちだが、私はいちおう「白き御遣い」である。

もしかしたら神様パワーでもくつついてるのかもしれないなあ、と私は自分の体をクンクンと嗅いでみた。……私の体からは昨夜胸毛にこぼした果汁の匂いくらいしかないが、ゴキブリ駆除薬のように「一度駆除した神気は再び侵入させません！」みたいな何かが、実は付いているのかもしれない。

王子は感涙にむせぶおじいさんに軽く頷くと、表情を変えないままに報告を促した。

「それで、城は今どうなっている」

「継承式は一時取り止めに。あの方は……捕縛されましたが、今回の事件に関与した貴族の一部を取り逃してしまいました。殿下の捜索と合わせて現在そちらにも部隊が派遣されております」

「そう、か……」

王子の表情が何だか固い。

まるで出会ったばかりのころの王子に戻ってしまったみたいだ。あの、何もかもを諦めたような……生きている感覚のない、あの表情。

「グォ」

私は王子にそんな顔をして欲しくなくて、王子の腰に頭をスリスリと擦りつけた。

今は葉っぱ王子じゃないから安心してできます。ウフ。

「……ふ」

そんな私の気持ちに通じたのか、王子は腰に擦りつく私に目を向けると、ようやくいつもの柔らかな表情に戻って笑ってくれた。

良かったー、あの死んだ魚みたいな目じゃなくなってる。

最後のお別れだっていうのに、あんな暗ーい雰囲気では別れたくないよ。

私と王子があまりにも仲睦まじく見えたのだろう、おじいさんが「御遣い様とお心を随分通い合わせたのですなあ」と微笑ましげに見ている。

皆は白き御遣い——私が王子に懐いていることに少なからず驚きを覚えていたようにだけでも、私からすれば「よくぞここまでデレてくれた!」と王子に言ってみてやりたいところだ。

最初のころはあんなに警戒心豊かだった王子が、こんなにも優しい表情で私の頭を撫でてくれるとか!

これが世間でいうところのツンデレ? いやいやクーデレ? とか思っちゃったくらいだよ、38歳のお姉さんとしては。

「殿下。お楽しみのところをお邪魔して申し訳ないのですが、国民が待っておりますればお早く王城へ御帰還なさいませ。いくらあの方が捕縛されたと言えども、殿下のお行方が知れなくなってから数週間。イルファンド第二王子殿下を擁立しようという動きも再び出始めております」

「ああ。……分かれている」

おじいさんの言葉に頷く王子。

いよいよ、王子ともお別れの時がきた………ということだろう。

私は鼻にツンとしたものを感じて、慌てて下を向いた。

獣のこの目は、人間だった時と同じように涙を流すのだろうか。

大好きな王子とのお別れだっていうのに、涙でいっぱい顔なんか、見せたくない。

精いっぱい笑顔で………笑顔………分かんないだろうな

あ、獣の顔じゃ……ああっこんなときまで獣の自分が憎い……！

最後まで、ちゃんと笑顔を見せたいんだ。

王子に「王子と一緒に楽しかったよ」って伝えたいんだ。

きっと人間と暮らすのは王子が最初で最後だと思う。

だから、私。

私、ちゃんと伝えたい。

このまま何も言わずにお別れなんかしたくない！！

（お願い神様、王子に伝えたい。私、王子と話せるようになりたい
！！）

私の心からの強い願いは――――。

白き御遣いは、神に遣わされた神聖なる獣。

悠久なる空を飛ぶ大いなる翼をもち、あらゆる災いを浄化する業火を吐く。

その姿は何者よりも大きく、何者よりも白く輝く。

御使いの真なる絆を持つ者よ。

清くあれ。誠であれ。強くあれ。

さすれば福音は訪れるだろう。

御使いによって訪れるだろう。

白き御遣いは、神に遣わされた神聖なる獣。

御使いの意志は神へと通じるのだ。

（ラマクダリ經典第二節「白き御遣い」より抜粋）

第17話 シャランラシャランラ、メタモルフォーゼ

ああ、神様。

あなたに会ったことなんか一度もないけれど、私って本当にあなたの御遣いなんだね。

王子と話せるようになりたいって願った私の想い、あなたが聞き届けてくれたんでしょう？

でも——一つだけ、あなたに聞いてもいいですか。

なんで私、幼女になってるのオオオオオ？！！！？！

「王子と話せるようになりたい」という願い。

私がそれを強く願ったとき、驚くべきことが私の身に起こった。

獣の四肢が、見る見るうちに人間のそれへと変わっていったのだ。

それぞれ脚が手や足の形を作り始めると同時に、骨格そのものが痛みも無くその形を変えていく。

フサフサとした白毛が消え失せて、その下に埋もれるように存在していた肌がその姿を現すと、ポヨンとした感触が私の表皮を覆った。前世ぶりに柔らかくポニポニする肌に驚いている間もなく、体中の毛が無くなっていくのとは正反対に私の頭部から白い毛がググーーンと伸びていく。

思わず「シャランラ☆」とでも言ってやりたくなるほどの変身である。

まさか我が身に魔女っ子のお着替えシーンのような事態が起ころうとは！

はー、長く生きてみるもんだ。

獣生としては7ヶ月くらいだけだ。

気付けばすっかり人間の体となった私は、いつの間にかしゃがみ込んでいた体をヨッコラセと起こした。

裸なのは仕様です。葉っぱ王子を馬鹿にできなくなりました。

しかし立ちあがっても尚「獣の時と目線が変わらないなー、むしろ低いなー」と思って自らを見下ろすと、私は驚愕の事実気付くこととなった。

(は、生えてない！)

どこが、とは言ってはいけない。

言っではいけないが、あるはずの草原が……38歳の大人のシンボルが……ない。

慌てて体中ペタペタすると、さらなる事実気付き、私は思わず頭を抱えた。

(…あ…あああ…よ、幼女になっちゃったあああ………)

立ちあがった体が、再びヘナヘナと地面に膝を付ける。
正直私は、自分が獣として生まれ変わった時よりもショックを受けていた。

だって幼女ですよ幼女！

いくら生まれ変わったと言ったって、たかだか7ヶ月分の記憶よりも前世の38年分の記憶のほうが重いんです！
この微妙な乙女心、察してください！

* * *

思い込みってあると思う。

人間に変わったんだから、きっと前世の自分の姿になっているんだろうな、とか。

きっと日本人の姿なんだろうな、とかさ。

しかし私が変化した姿は、顔こそ自分ではわからないが少なくとも日本人ではないようだった。

というか黒髪ではなくなっていた。

胸のあたりまで伸びている軽くウェーブの付いた髪の毛は、お見事なほどに真っ白。

白い獣だったときにちょっと自慢だった、白くてフワフワした毛がそのまま伸びましたよーという状態。

肌は黄色人種らしく黄色いかと思いきや、象牙色の肌に薔薇色が乗ったような色。

あえて例えるなら、猫の地肌の色をホンノリさせたような感じかな。ホラ、動物の地肌って薄ピンク色してるじゃない。それをもっと薄くして、膝小僧とか肘のあたりだけピンク色が濃く—————ってどんな萌え系少女だ、私は！

自らの変貌にやや動揺しつつ、それでも私は自分が人間になろうとしたキツカケを思い出して、傍らで呆然としている王子へと向きなおった。

王子のみならず人間たちもみな一様に口をアングリと開けて固まっていたが、それは……まあ……うん。そりゃビックリしますね。獣が人間になったんだもの。

（まさかこの中にロリコン属性いないでしょうねえ？私、いま素っ裸なのよ。ロリコンがいたら、まーさーにーデンジャラス！）

などと疑いの目で人間たちを見つつ、私はいつものように王子の腰回りにへばりついた。

何と言ってもここが一番安心する気がする。

王子にくつつくことができるの、これが最後になっちゃうんだけど。さ……。

私にしがみつかれて、王子はようやく我に返ったようだった。ハッとした顔を見ると、マジマジと私の姿を見つめる。

思いのほか強いその視線が恥ずかしくて、私はいつものように王子の腰に頭をスリスリとこすりつけた。

その仕草で確信が持てたのだろう。王子は私を自分の体から一旦離すと、目線を合わせるようにしてしゃがみ込んだ。

「お前は……白き御遣い、なのか？」

その問いに、私はウンウンと頷く。

御遣いという自覚は未だにないけれど、先ほどの獣なのかと言われればそれは正解だから。

私の「是」という答えに、王子は「まさか、このような…」と驚愕に満ちた顔をしていたが、驚いているのは私も同じだ。

でも神様が私の願いを叶えてくれたのだろうかということは間違いない。

（さあ、お別れを言おう。王子に「ありがとう」って。「楽しかった」って）

私はお別れの悲しみに少し潤ってしまった瞳で、そっと王子を見上げる。

サラサラ金髪に青い目の王子様。

一緒にご飯食べたり。泉で水浴びしたり。

獣の私が人間みたいな動きをするのを笑ってくれて。

「お前は変わった獣だ」と言いながら、でもとても優しい顔で私を撫でてくれるんだ。

私の背に乗りたがって、私が「ガァッ！（やだっ！）」ていうと不

貞腐れた表情で拗ねてみたり。

私の毛付き葉っぱベッドを占領して、無言で「怒ってるぞ」とアピールして。

仕方ないなあって背中に乗せてあげると、いたずらの成功した少年みたいな顔で指を鳴らして笑っていた。

（ありがとう。ありがとう。私はこの思い出を大事にして、生きていくよ）

万感の思いを込めて、私はゆっくりと口を開いた。
王子に、気持ちを伝えるために。

何かを語ろうとする私に、周囲の人間たちもゴクリと喉を鳴らして注目していた。

目の前の王子も、神妙な顔で私の言葉を待っている。
私は王子に、「今までありがとう王子、大好きだよ」と言おうとしたのだが。

「いまーであいあとーおーじい、だいしゅきだお」

口から出たのは――――まさかの幼児語であった。

………神様！

確かに話せるようにはなったけど、これじゃ私の言葉は伝わらないと思います！

第18話 幼児は口が回りません

「御遣い様、私のことはどうぞ『じーちゃま』とお呼び下さいませ」
「じーちゃまあでしゅか？」

すっかり相好を崩しているその様は、まるで孫を抱く祖父のようだ。
おじいさんが「じーちゃま」呼びを熱烈に希望しているようなので、
私は「じーちゃまですか？」と素直に聞き返した。

いまいち舌足らずなのが何とも情けない。

脳内は立派な大人のはずなのになあ、あつても見た目は幼女だから
いっかあ、なんて思いつつ私は「じーちゃま」の腕の中から隣を歩
く王子を見上げた。

（まさか私も一緒に王城に行くことになるとは思わなかったなあ）

いくら獣と言えども見るからに幼い女の子を山に一人置いていくの
は忍びない、と心ある人間であれば皆そう思うだろう。

そのおかげで王子と離れずに済んだのなら人間になって良かったな
あ、と思いきや。

獣だろうが人間だろうが、どちらにしても私を王城に連れて行く予
定だったらしいことが判明して、私の肩からは一氣に力が抜けてい
た。

「白き御遣い」というのはそれだけ国にとって重要な存在なんだそ
うだ。……私の涙を返せえっ！

「……私の顔に、何か付いているか？」

私は今、じーちゃまの使っていたマントに身を包まれながら王子を

じいーっつと見つめている。

そんな私の視線を受け、王子は少し居心地が悪そうだ。

獣の姿の時もわりとこうやって見てたんだけどね。人間の姿で同じことをすると、それはそれは気になるものらしい。

「なあんもないお!」と言ってニコニコしていると、王子はますます落ちつかない様子で「そうか」と呟いた。

いやー人間っておもしろいね!

私の姿が違っただけで、こんなにも反応が変わるものらしい。

少し私から距離を置いて歩く王子とは逆に、先ほどまで獣の私に怯えていた人間たちのほうが今や私に近づいてくるくらいだ。

「御遣い様、私はアラヴィと申します。どうぞお見知りおきを」

王子が歩いているのとは反対側、じーちゃまの左側から近寄ってきた青年が私に恭しく挨拶を送った。

甲冑姿の面々とは違い、長いローブを身に纏ったこの青年は随分と柔和な顔立ちをしている。

つい数分前まで地面に手をついて見るからに怪しくブツブツと呟いていた青年とはとても思えない。あの精神的にイッチャってた言動はどこへ行ったのか。

大人の女性としてはスルースキル「見て見ぬふり」を発動しようかとも思ったが、どうしても気になったので私はあえて突っこませてもらう。

「さっき、じえんにてえおついていたの、なえなんでしゅか?」

「……………はい?」

「じえんに、てえ! ついてたの、なえってきいちゃのでしゅお!」

「じ、じえんにてえ? ……それは神語か何かでしょうか、不勉強で

申し訳なく…」

「ちゃーうの！」

くっ…なんてことだ。

言葉が話せるのに通じないとは……！

私は極々シンプルに「地面に手をついてたの、なぜなんですか？」
と言っているつもりなのに、どうしても理解してもらえない。

通じない言葉に、私はイライラとして手足をジタバタ動かすと、右側から「アラヴィ。お前が地面に手を付いていたのはなぜか、聞いているのではないか？」と思いがけない言葉が聞こえてきた。

咄嗟に振りかえると、そこには相変わらず居心地悪そうな顔をした王子。

（さすが王子っ！1ヶ月も一緒に暮らしてきただけのことはあるね
！）

私は嬉しくなって手をパチパチと叩くと、王子は再びフイツと視線を逸らしてしまった。

しかし、その顔が耳まで赤くなっているのを私は見逃さない。

どうやら王子は、私が人間化したことでツンデレだかクーデレだかのデレ前の状態まで戻ってしまったらしいが、いやいや全く問題無いね！この様子を見る限り、急に姿の変わった私に照れと戸惑いを感じているだけだろう。

だったら今度は、この幼女姿にデレ発動させれば良いのだ！

尤も幼女にハアハアするような変態になり下がったら、今度は私が避けさせてもらうけど！

「私が地面に手を付いていたのはですね、この辺りの神気を抑えるためにキュールしていたのですよ」

アラヴィ君が身振り手振りを加えて分かりやすく教えてくれた情報によると、どうやらあの辺り一帯は特に「神気」が濃く、常にあるやって「キュール」とやらで神気を抑えていないと倒れてしまうくらい酷いものだったらしい。

「神様の気」と書いて「神気」らしいが、神聖なものわりに随分とやっかいなものなんだね。

今はキュールしないでいいのかと問えば、「御遣い様が抑えてくださっていますから」と微笑み付きで返ってきた。

「私たち、なあんもしゅてないでしゅお」

「『私、何にもしてないですよ』と言っている」

王子、ナイス通訳！

「御遣い様がいらっしやるだけでその周囲の神気は丁度良い濃さに調整されるのですよ」

アラヴィ君はニッコリと笑って「そのお力で、王子殿下も救われたのです」と教えてくれた。

ほほーなるほどね！

だから私はずっと山にいても大丈夫だったし、私のそばにいた王子もメキメキ元気になったというわけか。

となると、ますます「どうして王子が神気の濃い山の中に転がっていたのか」ということが気になります……、そこは聞かないでおきます。私は食うに困らずに王子に甘えられればオールオッケーなんです。陰謀とかには出来るだけ巻き込まれない方向でお願いします！

「このしゅがたでもちよーせーしやれりゆのでしゅか？」

「『この姿でも調整されるのですか？』と聞いている」

気になっていたことを聞くと、すかさず王子の通訳が入った。

「ええ。御遣い様が人間になったという話は聞いたことが無いのですが…、どうやら人間のお姿でも変わらないようですね」

そこで、アラヴィ君は一旦言葉を区切った。

言おうかどうしようか迷うようにしばらく視線を彷徨わせ、最後に王子にチラリと目を走らせてから決意したように口を開く。

「白き御遣い様は……どこの国でも尊ばれます。それだけのお力をお持ちですから。…しかし、御遣い様……あなた様の場合はこのような愛らしいお姿をされています。もしやの事態も考えて、あまり王子のそばを離れないようになさったほうが良いかもしれせん」
「そうですな。私も、そのように存じます」

じーちゃまもそれに深く頷いた。
もしやの事態というと……。

「誘拐、か。しかも人型ならば……最悪、子を産ませようと企むものが出てくるやもしれぬな」

（なんだとー！ー！？！ー！）

王子が憂い顔で「下種はどこにでもいるからな…」と呟くのを、私は若干顔を青くして聞いていた。

それってもしかして、アレですか。

神の力を手に入れようとか、産まれた子供を使って世界を支配しようとか、そういうことですか！

恐ろしいよ、人間！恐ろしい……………って私も前世は人間だったけどさ。さすがに誘拐とか強姦沙汰とは縁遠いところにいたから、やっぱりそういう展開は怖いよ。

アラヴィたちの忠告に、私は「絶対に王子から離れないようにしよう」と強い決心を固めた。

元より離れるつもりもなかったけど、自分が希少価値の高い存在なんだということを私もしっかりと自覚しておいたほうがいいのかもしれない。

そう考えると変身したのが幼女姿で丁度良かったなあ、と私は隣を歩く王子を見ながら思っていた。

もし誘拐されても幼女なら子供なんて産めるわけがないし、それに……………。

(……………見るからに結婚適齢期の王子に私がへばりついていたら、結婚できるものもできないだろうし、ね)

私はすっかり王子に甘えるクセがついてしまったけれど、38歳の女の姿で王子に甘えていたら明らかに玉の輿狙いの嫁き遅れっぽく見えるし。王子と結婚することになるであろう女性だって…………、おもしろくないと感じるに決まっている。それはいろんな意味でマズイだろう。

私は王子とこれからも共に暮らしていく。
人間の世界に降りて行くのは……正直に、怖い。不安もある。
それでも、私は王子と一緒にいたいのだ。

私は少しばかり不安を滲ませた顔で王子を見上げた。

王子が「……なんだ？」と目を逸らさずに問うてくれたので、私は心の中にあつた不安をそっと吐きだす。

「……おーじょーってとこおに行くんえしょ？ わたち、なあんもしな
あでいーの？」

「『王城ってところに行くんでしょ？ 私、何にもしないでいいの？』
と聞いている」

……………。

いや、それ王子に向かって聞いたつもりだったんだけど。

第19話 いざ人間世界へ

じーちゃまの腕に抱かれて山を下りながら、私は少し感慨深いものを感じていた。

いくら野生的サバイバル生活だったとはいえ、半年間も住んだ巣穴を離れることになったのだ。

寂しいという気持ちが湧いてもおかしくない————はずなんだけど全然、全く以て寂しくないのは何故なんだ！

どうやら私という獣は、結構薄情な獣だった模様です。

「おお、そういえば御遣い様にお名前をお付けせねばなりませんな」
「なあま……わあ！」

じーちゃまは私の脇の下に手を入れて「高い高い」しながらニコやかに話しかけてくる………ってコラコラコラ、私これでも大人ですよ！たぶん、じーちゃまの子供さんと同じくらいですよ！

「そう、お名前です。例えば私はグラウと申します。そして彼らにもロイズ、ニコル、サマンディといった名前があります」

私の内心を知ってか知らずか、じーちゃまは「高い高い」を止めると、傍らにいる甲冑たちを私に指し示した。

名前を呼ばれた彼らは次々に頭を下げていく。

頭を下げながらも時折私と視線が合うと彼らは優しく微笑んでくれて、私は少しばかりドキドキする胸をそっと抑えた。

（幼児、バンザイ……！こんな優しい目で見て貰えるなら、幼児で良かったと心から思うよ……！）

彼らだって、人の子だ。

いかに白き御遣いの化身と言えども、38歳独身女にはさすがにここまで優しく微笑んではくれまい。

「こうしてお名前があるととても便利なのですよ。ですから御遣い様にもお名前を——」

「なあまあなあ、あいましゅ。かのーいちゅかでしゅお」

くっ、この舌が憎い！

「名前なら、あります。叶五香ですよ」と言いたいののに、この回らない舌めっ！！

しかし私には通訳マン・王子がいる！

私が期待を込めた目で王子を見つめると、王子はやや顔を赤くしながら「彼女の名前ならすでにあるそうだぞ」とじーちゃんに伝えてくれた。

この照れ屋め。でも愛いヤツ！

「ほお、さすがは御遣い様。生まれながらにして名をお持ちとは」

じーちゃんがやたら感心してくれるので、私はエヘンと胸を張った。得意げなその様子がとても幼く可愛らしく見えたのだろう、じーちゃんはデロデロに甘い声で「御遣い様は可愛らしくていらっしやいますなあ」と目尻を下げた。

そのまま頬ずりしそうな勢いに、しかし私は若干体を引く。抱っここと高い高いは我慢するけど、頬ずりだけは勘弁です。

「それで殿下。御遣い様のお名前とは」

「ああ」

自分しか通訳ができないからか、心もち得意げな顔をする王子。
私は王子に「よろしく頼むよ、通訳クン！」と目配せをすると、王子は小さく頷いた。

「彼女はカノーイⅡチュカという名前らしい」

ちっとも分かって無いじゃないかああああ！！！！

* * *

私が住んでいた山はアムネス山というらしい。

皆と下山して辿りついたアムネス山麓の町・リザンシェは、面白いくらいRPGの街並みに酷似している町だった。

前世で日本に住んでいた記憶に基づいて言えば、町というのは「この線からこの線までが町だから、この線に沿って丸く家を建ててくださいねー」というものではなかったはずだ。
しかしこのリザンシェという町は、不思議なほど綺麗に丸く形作られた町だった。

主に私への説明役を買ってくれているアラヴィ君によれば、中央に造られた神殿を中心として発展した町だからこそ、このような形になっているんだそうだ。

神気をキュールすることのできる神官たちは毎日神殿で祈りを捧げており、自然と神殿周囲はもつとも神気が程良く感じられるポイントらしい。

濃すぎる神気は体に毒だが、程よい濃さの神気は身体の治癒・強化効果がある。

だから、多くの町民が「より神気の恩恵を受けるために」神殿の近くに居を構えようとした結果、このような円形上の町になったのだとか。

「カノーイ様。我々は一旦神殿に寄ってから王城に向かおうと存じます」

すっかりカノーイと改名させられた私は、じーちゃま……グラウにそう告げられて神殿へと目を向けた。

神殿は何本もの太い柱で支えられた石造りの建物だ。

近くまで行って気がついたのだが石といってもコンクリート状のものではなく、淡い乳白色をした天然石を使っているようだ。

透き通るようなその色に私は「ムーンストーンで出来ているみたい」とウツトリと眺めた。

（ちょっと削ってアクセサリー作ったら怒られるかなあ…、でも私「白き御遣い」だから許されるかなあ）

そんな心の中が表に出ていたのだろう、周囲の誰かからコホンという咳ばらいが聞こえてきて私は慌てて眺めるのを中断した。

危ない危ない、ちょっとくらいヨダレが出ていたかもしれない。

第20話 目指すはアニマルセラピー

私たちが神殿に着くとほぼ同時に、神殿の中から長いローブを着た人間たちが続々と出てきた。

次から次へとワラワラと……って本当に多いな！

全部で何人くらいだろうか。

ひいふうみい……と目で数え始めたが、しかしすぐに私は数えるのを放棄した。

ざっと見積もって200人は軽く超えているくらい？数えてられっか！

面白いのは、彼らのローブの色は揃って乳白色をしていることだ。

神殿の石の色といいローブの色といい、「この色は神聖な色なのかもしれない」と私は予想を立てた。

同じローブでも王子の後ろに控えているアラヴィのローブは薄い緑色をしているので、彼はたぶんこの神殿の所属ではないのだろう。

しばらくぼんやりと眺めていると、ローブ軍団の中から一番偉そうなオッサンが私たちの前へと歩を進めた。

オッサンは王子の前にやってきて跪くと「まずはご無事で何よりでございます、王子殿下」と述べて頭を垂れた。

それに対して王子は軽く、本当に小さく頷くとオッサンに私を指し示す。

「神に仕えるそなたたちからすれば、不可抗力とは言え聖地に足を踏み入れた私に思うところもあるう。しかし、今回は良い方向に物事が動いたようだぞ………紹介する、彼女はカノイー・チュカ様。

白き御遣い様であらせられる」

（あ、カノーイ！ チュカはやっぱり決定なわけね…）

王子が（怪しい名前に改名してしまった）私を紹介すると、その場にいたローブ軍団が一齐にどよめき出した。

彼らの驚きは尤もだ。

突然王子が幼女を連れてきたと思ったら、その幼女こそが彼らの信仰している神の御遣いだというのだから。

アラヴィ君が「今まで御遣いが人間になった話は聞いたことが無い」と言っていたくらいだ、彼らが驚くのも無理はないだろう。

しかしここで私が白き御遣いであることを彼らにも認めてもらわなければ、私の優雅な食っちゃ寝生活が保証されない危険がある。

今更山へ戻れと言われてもこんな牙も爪も、そして毛皮さえない姿で生きていける自信は1ミクロン足りともないし、それに私はもう、一人ぼっち生活に戻ることだってできそうにない。

最早私はガッチリ飼い慣らされたペットのように終生養ってもらおう気満々です。

私はグラウの腕をポンポンと叩いて下に降ろすよう要求すると、裸足のまま地面に足を付け「こんにちゃ。かのーいちゅかでしゅ」と挨拶をした。

人間関係は挨拶から。これ基本です。

しかしきちんと「こんにちは。叶五香です」と挨拶をしているつもりだが、いまいち発音が決まらないのだけがちよつと切ない。

挨拶を済ませた私に、四方八方から大量の視線が突き刺さった。

私を怪しんでのことだろう、それは好意的なものばかりとは言えず、私は居心地の悪い思いで王子のそばへと寄って行った。

あー王子のそばがやっぱり一番安心する。一種の刷り込みでしょうか。

「み、御遣い様ですと?!この、子供が……」

「ああ。私は御遣い様に命を救われ、しばし共に聖地で暮らしていたのだ」

「なんと……驚きましたが……、……しかしながら…王子殿下。白き御遣い様といえば、大きな翼を持った白いワルガーの姿をされておられるはず。確かにこの子供は珍しい…白髪ではあるようですが、さすがに御遣い様とは」

偉そうなオッサンは驚きつつも疑わしそうな目で私を見下ろしている。

ハッキリ言って「こんな子供が御遣い様だと?!アホ拔かせこのバカ王子」とその目は語っていたが、王子という立場の手前表立っては言えないのだろう。オッサンは言葉を選びながら慎重に王子の様子を窺っている。

王子はそんなオッサンに「ふん」と小さく鼻を鳴らすと、

「元々は獣の姿をしておられた。聖地から下りる時に人間の姿へと変身をなされたのだ」

と言って、同意を促すようにグラウへと視線を向けた。

グラウがそれに深々と頷くと、オッサンは急に慌てたように「まさか」と目を見開く。

「た、確かに……この子供からは妙に安定した神気を感じますが…
…」

「本物だからな」

「ですがどのような奇跡が起これば——っそうか！ 経典第二節
……白き御遣いの意志は神へと通ずる……！」

天啓が下りたかのようにオッサンは固まり、次いでローブの裾を翻
して私の視線の高さまでしゃがみこんだ。

オッサンの茶色い目が、私を射抜くように凝視する。

（うひい…怖いよー！ キモチワルイよー！）

私は少し怖くなって王子の足にガシツとしがみ付くと王子の後ろへ
隠れた。

オッサンの目が、微妙に血走っている。

……そこまで見るな！ 瞬きもちゃんとして！ 怖いから！

「ということは待て、……の伝…はもしや……れない……」

オッサンに慄いていると、オッサンは何やらブツブツと独り言を呟
いて神殿へと戻っていく。

その去っていく後ろ姿を見ながら、私は「去ってくれて良かったけ
ど、あの人の頭は大丈夫だろうか……」とにわかに滲んだ冷や汗を
拭った。

それに、この神殿で一番偉そうな人に見えたけど、王子を放って勝
手に帰っちゃってもいいのだろうか。いや、普通に考えてマズイだ
ろう…。取り残されたローブ軍団も「どうしたらいいの」と言いた
げな顔をして王子とオッサンの後ろ姿を見比べてるし。

オッサンの一部始終を見ていた王子は、もう一度フンと鼻を鳴らす
と「御遣い様はお疲れだ。神殿に部屋を用意を」と言いながら私の
脇の下に手を差し入れて抱っこした。

その王子の言葉に慌ててローブ軍団の一部が神殿へと走って行く。

きつと部屋の用意をしてくれるのだろう。

（いやー悪いですねえ。とりあえず、食べるものと寝るところさえあれば山の中よりパラダイスだと思うので！）

走っていくローブ軍団の背中に心の中でお礼を述べると、私は自分を抱きかかえる王子を見上げた。

王子にこうして抱っこされるのは初めてだ。

獣の姿で抱っこなんてしたら王子が間違ひなく潰れるし、この幼女姿に変わってからならグラウジーちゃんか私が私を手放さなかったからね。

王子の抱き方は慣れていなくてちよつと安定感が悪いので、私はヨジョジと手の力でよじ登って王子の首に腕を回すと体勢を安定させる。

途中、王子の「こら：動くな」という声が聞こえてきたが無視無視。しっかりとした安定感を得ると、私は目の前で戸惑った表情をしている王子を、ここぞとばかりにジツクリと観察した。

山で暮らしていても尚、輝きの落ちることのなかったキラキラの金髪。

スツと筋の通った鼻梁。

私の行動に戸惑うように揺れる青色の瞳。

しかし少し薄めの唇は今キュッと結ばれ、山にいた頃に比べると表情もやや固い。

（山にいた時は、あんなに楽しそうに笑ってたのに）

人間の世界に降りてきてからの王子は、まるで何枚もの壁で周りから自分を覆い隠しているみたいだ。

この中で一番親しそうに見えるグラウにさえ、ろくに笑いかけると

ともないのだから。

「王子殿下」というものは、獣の私には分からない難しいものがあるのかもしれない。

私は王子のそんな表情を崩したくなって、その頬に手を添えてみる。獣の時はできなかった仕草だが人間の姿ならこうも簡単にできるものなんだな、と改めて実感しながら、王子の頬を優しく撫でた。

最初にサワサワと顎のあたりをくすぐり、目元まで一気に撫で上げる。

「っ！」

途端に、カアアツと熱くなる王子の頬。

すぐにパツと顔を逸らされてしまったが、隠しきれないその横顔は耳まで真っ赤になっている。

「おーじい、かお、まっか」

私がからかう様にニンマリしていると、王子は仕返しのように突然「…馬鹿者！こうしてやる…っ」と振り返ると、私の手をパクツと口の中へ咥え込んだ。

(?!)

私の紅葉のような小さな手が——王子の口の中にスッポリ収まってしまっている。

あまりの驚きに為すがままにされていると、王子は口の中でモゴモゴと舌を動かし、私の指の一本一本を舐め上げていく。指の腹から指の股までそれはそれは丁寧な。

時々口から出して、手の側面を咥えるように優しく食んで、再び口

の中に入れてしゃぶる。

唾液がこぼれないように最後にチュッと吸ってから王子が私の手を解放したところには、すっかり私の顔も王子と同じように真っ赤に染まっていた。

「……ふ。お前も、これで真っ赤だ」

赤い顔のままで言い放った王子に、私は口元をワナワナと震わせながら王子の唾液が残る手を見つめていた。

……そうだ、この人間はそういうヤツだったのだ！

私の体が人間化した後は照れていたのか大人しかったけれども、山で暮らしていたときは散々こういう揶揄いをされていたのに、ウツカリ忘れていたなんて私のバカバカバカ！

「うー！」

人間の姿の私が唸っても迫力がないのは承知で、唸りながら唾液でキラキラ光る手を見つめた。

王子の唾液がたっぷりについている私の手はプクプクとしていて、さぞかし舐め心地も良——じゃない、いたいけな少女になんてことしてくれるんですか！これ、相手が私じゃなきゃ変態ですよ！いやいやいや中身が38歳でもアウトかもしれない。

唸りついだに軽く噛みついてやろうかと思い、王子へと視線を移す。しかしそこにあった表情を見て、私はパカッと歯を剥き出しに開けた口のまま固まった。

王子は、……山では毎日のように見ていた笑顔を浮かべていたのだ。

表情が乏しくロボットみたいだった先ほどまでと比べると、その笑

顔は生き生きと輝いていて。

私は噛みつきこうとしていた口をゆっくりと閉じると、意識しないままに王子の体に頭を擦り寄せていた。

私は「王子殿下」が好きなわけじゃない。

ちよつと変態くさくても、意地が悪くても、いつもの王子が好きなんだ。

そんな気持ちが伝わると良いなと思って、髪がグシャグシャになるのも構わずに、王子の肩口にこれでもかと頭を擦りつける。

スリスリスリスリスリスリスリ。

しつこいくらい擦りよると、王子は声を立てて笑いながら「分かった分かった」と頭を撫でてくれた。

その手はまったくいつもと変わらない仕草で、私はホッと息を吐いた。

グラウとの会話から察するに王子にもいろいろと事情がありそうだけど、ペット(?)の身としてはせめて一緒にいて安らげる存在でありたい。

王城に行っても「ちよつと手を伸ばせばアニマルセラピー」をキャッチコピーに、王子を癒せる存在を目指していききたいところだ。

思う存分王子に擦りよって甘えていると、周りにいたグラウやアラヴィたち、その場に残っていたローブ軍団の皆さまからのざわめきが聞こえてきて、私はハッと我に返った。

慌てて周りを見回すと、何とも微妙な顔をして囁き合っている人間たちがこちらを見ている。

(これは…見てはいけないものを見てしまった顔だ…)

彼らにしてみれば、自国の王子が突然少女とイチャつきだしたように見えたのだろうから、戸惑うのも無理はないのだが。

本人たち（私たち）はどちらかというとアニマルセラピー感覚でいるんだけどなあ…と私は小さな溜息を吐いた。

いつか「熱愛発覚！王子殿下と白き御遣い、種族と年齢を超えた彼らの恋愛事情に迫る！」とかいう特集でも組まれてしまうのではないかと、私の頭の中を阿呆らしい想像が駆け抜けていくが、周囲の人間たちの様子を見る限り……現実になりそうでちょっと怖い。そんな私の心を読んだのか、王子はやけにイイ笑顔でニツコリと笑う。

（あ、なんか嫌な予感のする笑顔）

こここのところの共同生活ですっかり覚えたその笑顔に背筋を寒くしている、王子はいとも軽々と言い放ったのだった。

「いっそ私の情人として城に行くか？」

……うん。

それでこそ、いつもの王子です。

この後、私が王子に猫パンチをかましたことは言うまでもない。

第21話 壊れた転送陣

リザンシェの神殿には少し寄るだけのはずが、結局私たちは20日間も滞在することになった。

それは、リザンシェから王都までの転送陣が一部壊れてしまったためだ。その転送陣を直すのにかかる期間が20日間ほど、ということらしい。

聞けば転送陣とは、特殊な液でかけられた魔方陣のようなもので、人間や物を一瞬にして遠く離れた場所まで送ることができるものなのだとか。

発動するには転送陣に神気を送り込むことが必要となるため、大抵の転送陣は各都市の神殿の一角に造られており、転送専門の神官がその場所に常駐しているはずなのだが……。

「全く、リザンシェの神官ともあろう者が転送陣を壊した挙句に逃走とは！」

王子に与えられた部屋では、グラウが苛立たしげに歩きまわっている。

そのすぐ傍のソファでは優雅にお茶を愉しむ王子。

王子はカップを口へ運ぶとお茶を味わうようにゆったりと喉を潤していたが、室内でウロウロと歩き回るグラウを目の端に映すとカップをソーサーへ戻し、小さく嘆息した。

「…お前まで苛々していても仕方あるまい。先触れは出したのだから?」

王子がお茶を飲み干してテーブルに置くと、すかさずアラヴィがお

代わりを注ぎ入れる。お茶の良い香りが広がり、グラウは匂いに釣られるようにカップに目を落とした。

アラヴィに「お代わりはいかがですか」と問われ、グラウは「いや…結構」と返事を返すと、やはり落ち着かないのか再び部屋中を歩き回り始めた。

「伝書鳥を…飛ばしましたゆえ、王子ご存命の一報はそろそろ届いているかと存じますが。しかし」

「ならば良いだろう。お前も少しは落ち着け。少しはカノーイを見習ってはどうか」

その言葉に、私は「ん？」と顔を上げた。

ウツラウツラとしていたのだが、私の名前が聞こえた気がして、「ふあああ…」と大きな欠伸をすると手を丸めて顔をガシガシと擦る。私、いつの間にかネコ科の習性がすっかり染みついています。

そして徐に、今まで枕にしていた王子の膝に手を付いて起き上がると、私はよちよちと未だおぼつかない足取りでアラヴィの足元まで歩き、「お茶をくdashや…くだ、さ、い」と強請った。

アラヴィはすっかり慣れた動作で「はい、どうぞ。御遣い様」とお茶を入れてくれながらも、乱れた私の衣服を整えてくれる。

ちなみにこの洋服は神殿に着いたその日に調達してもらった物だ。いくら幼児の体とはいえ、裸のままではマズイからね。

「前世で娘がいたら着せてやりたいようなワンピース…」などと前世では結婚すらしていなかったのにウツカリそんなことを考えてしまうほどに可愛いワンピースだったが、私は恥ずかしながらもそのワンピースをありがたく着させてもらっていた。

正直な感想は「こんなこっ恥ずかしい服、着られないよ!」といったところだが、居候の身で贅沢は言えません。

それにフリルたっぷりの乙女ワンピースであろうとも、今は幼児の体だから視覚的にも許容範囲内！…のはず！たぶん…。

さっきまで気持ちよく寝転がっていたため割と乱れていたのだろう襟元も、アラヴィにちょいちょいと正されながらお茶を一口、口に含む。

紅茶に似た味わいのお茶はとても飲みやすく、寝起きに近い体にも優しい。

「あり、がとう。美味しー、です」とたどたどしい言葉でお礼を述べると、アラヴィは「どういたしまして」とニツコリとした。

アラヴィという男は本当によく出来た男で、こうしたお茶汲み仕事も率先してこなしてくれている。

本来こういったことは侍女の仕事ではなかろうかと思うのだが、神殿で働いているのはみな神官——男性のみ。

ましてや王子が他人を側に寄せ付けることを嫌ったため、結果アラヴィが王子や私の世話のほとんどをしてくれているのだ。

（アラヴィのおかげでこんなのにのんきにしていられるんだと思うよ、ホント）

感謝をこめて見つめていると、何を勘違いしたのかアラヴィが「ああ、お菓子もどうぞ」と差し出してきたので、私はさっそく焼き菓子を口に頬張った。うん、うまい！

「いやはや、ここ数日で御遣い様もだいぶ言葉が達者におなりになりましたなあ」

成長した孫を見るように微笑ましげな目でグラウに見つめられて、私は一生懸命咀嚼してお菓子を飲み込むと「あり、がとう」と照れ

笑いを浮かべた。

人間に姿を変えた後、まさかの幼児語しか喋れなくなった私は、発音を何とかしなければと毎日アラヴィ相手に猛特訓を重ねていたのだが……どうやら成果はしっかりと表れているようだ。

いくつになっても誉められるのは嬉しい。

私はますます「言葉の特訓を頑張らなければ」と心の中で拳を握る。

「……王子殿下、御遣い様はとても賢いお方なのかもしれませんね」

そんな私を眺めていたアラヴィが言うと、王子は「なぜそう思う」と即座に問いかける。

「言葉というものを理解されているからです。花、空、椅子といった単語もさることながら、食べる、寝る、座る、ありがとう、……：……御遣い様は言葉をよくご存知です。発音が巧くできないだけですから、それさえ巧くできるようになれば会話の内容はほぼ大人と変わらないかと」

そう言われて、私はドキッとした。

幼児だと思われているから許される行動ってあると思う。

しかし最近の私の行動といったら、全くの子供と等しい。

いくら今生の私は獣とはいえ、前世の38歳の意識を持ったままで王子の膝で厚かましくも寝たり、甘えたり、背中にくら下がりたりしているのだ。

これは……精神年齢がバレたら、いろいろとマズイ気が……。

「そういえば、聞いたことが無かったな。カノーイ、お前の歳は幾つなのだ？」

「え？」

部屋にいる3人の視線が突き刺さってくる。
私はしばらく視線を彷徨わせて考えてから、

「な……………なな、かげちゅ…でしゅ」

エヘッと子供じみた笑顔を意識しながら笑ってみせた。

「……………」

「……………」

「……………」

三人に微妙な顔をされる。

「……………な、ななかげ、つ。です！」

しばらくの沈黙の後、それぞれに嘆息された。

……………という意味の嘆息ですかね、それ。

「話を戻すが、転送陣を壊した神官は未だに逃走を続けているのか」
王子は再び膝によじ登ってくる私に手を貸しながら、グラウへ問いかける。

その質問にグラウは苦笑いを浮かべて「らしい、ですな」と返した。

グラウが浮かべた苦笑いの意味が分からなくて私は首を傾げたが、その答えはすぐにもたらされた。

「この町に駐屯させている国軍の調査兵をお貸ししましょうか、と提案しましたが……さすがリザンシェの神殿ともなると、いともあっさりと断られましたよ。逃げた神官の情報すらいただけません」
「神殿はプライドが高いからな。我がフィヨルド国内で起きた事件であろうと国の施しは受けぬ、と。そういうことか」

「或いは国が関与しては不味い事態が起こっているか……ですかな」

グラウの言葉に王子は「国が関与しては不味い事態、か……」と呟く。

私は考え込む王子の袖をクイクイツと引っ張って「どー、して、国のヘーしがかいにゆ……介入でき、ない、の？」とたどたどしく聞いた。

王子たちの話を聞いていると、この町は王子の国……フィヨルド国内の町だという。

国内の町ならば当然に国軍兵が介入してもおかしくないだろうに、と私は不思議に思ったのだ。

「神殿は特別なのだ。他国でも同様だろうが、王家は神殿を軽視することはできぬ」

「とくべ、っ？」

「そうだ。何しろ、神気を管理できるのは神官のみ。特にここリザンシェは聖地の麓の町だ……、余程の事態でも起こらぬ限りは国の介入を許さぬだろうな」

全く頑ななことだ、と王子は肩で溜息をついた。

確かにここ数日で得た情報によると、神官とは随分多くの役目を担

っているようだった。

神気を調整して病人たちに治療を施す医療行為。

要所要所に設置された転送陣の管理。

強すぎる神気から町を守るための神気中和^{キユール}。

特に神気が強いとされるこのリザンシェの町では、きっと彼らの立場も強いものになっているのだろう。

ならば神官と同じようなローブを着ており、なおかつキユールもできるアラヴィはどういった存在なのだろう、とアラヴィを見ると、視線に気がついたアラヴィはニツコリと笑って教えてくれた。

「私のように神殿ではなく国に仕える神官もありますよ。神官は自分で、国に仕えるか神殿に仕えるかを選ぶことができますのです。大抵はそのまま神殿に残るようですが、愛国心の強い者はやはり国属になることを選びますね」

「御遣い様。正直なところ、アラヴィのような神官を我が国としても歓迎しているのですよ。王城にも転送陣はございますが、神官の力なくしては発動もできませんからな。彼らの為す役目は大きい」

グラウがそう言ってアラヴィを評価すると、アラヴィは「恐縮です」と少し面映そうに頭を掻いた。

神殿に滞在して数日経つが、いつも私や王子の身の回りの世話をしてくれていたアラヴィが実はそんなにすごい人だったのか、と私は思わず尊敬のまなざしでアラヴィの顔を振り仰いだ。

アラヴィはアラヴィでいつも「御遣い様」を敬愛のまなざしで見つめているので、お互いに目をキラキラさせて見つめあう姿は……傍から見るとかなり奇妙な光景である。

「…まあ、ともかく今しばらくは神殿に滞在することになるのだ。焦っても仕方あるまい」

王子はそう結論付けるとアラヴィに少し冷めてしまったお茶のお代わりを頼み、私の頭を自分の膝へと押しつける。……どうやら「寝ろ」ということらしい。

私としてはもう少しアラヴィの話を聞いていたかったが、「飼い主」がそう言うのでは仕方ない。

私は王子の膝に頭を一擦りすると、獣の時と同じように丸まって眠りの体勢に入った。

コッソリ薄眼を開けると、優しく見下ろす王子、そしてその向こうに「やれやれ」と苦笑するグラウが目に入る。

アラヴィの姿はこの体勢では見えないが、ポットに新しい茶葉を入れ、蒸れて葉が開くのを待っているのだろう。

こうして、この日も静かに過ぎ去っていった。

のんびりと過ごす私たちの陰で密かに動いている人物が或る計画の準備を着々と整えていることに、私たちは———まだ気付かない。

第21話 壊れた転送陣（後書き）

王子は割と心が狭いので、アラヴィとカノーイが見つめあっていたことが気に食わなくてカノーイに寝ることを強要したのかと思われます。

第22話 神殿探検

現在、私は神殿内の探検中である。

王子たちは今頃部屋で私には聞かせられない難し〜い話をしているそうなので、私はこうして王子たちには内緒で探検しているわけなのだ。

私が神殿を探検し始めてからというもの、幾人もの人間から声をかけられたが、大体相手の反応は2種類に分けられた。

例えば神官。

彼らの場合は私を見るなり、「御遣い様！」と伏し拝んだ。

……文字通り、伏し拝むのだ。床に頭を擦りつけんばかりに姿勢を低くし、ありがたやありがたやと拝み倒す。こちらとしてはちっとも有難くない。

それでも彼ら神官はまだいいほうだ。彼らは「白き御遣い」に対して敬意を強く持っているため、一定の距離を置いて話しかけるから害はない。

もちろん平伏して拝まれるのは嬉しいものではないが、それでも勝手に私に触れようとしなだけマシだ。

私が辟易するのは、神殿にお祈りやお布施にきた女たち。

彼女たちの場合、数人の集団で現れては「きゃー可愛い!!」などと騒ぎながら私を代わる代わる抱き上げては頬っぺたをしつこいくらいに突くのだ。

私の頬っぺたが柔らかいのは分かる。突きたくなる気持ちも分かる。私だって前世、友人の子供を見ては「可愛い!」と心ゆくまで頬っぺたを突いたものだ。

しかし自分がされる立場になった今は、あのとき突きに突いた友人の子に心底詫びを入れたと思うほどに私は辟易していた。頬っぺ

たツンツン、地味に痛いです。

そんな彼らから我が身を守るには、王子のそばに隠れるのが一番の策なのだが…。

（まったく、なーにが「これから大事な話し合いをするから部屋で大人しく待っている」よ）

先ほど言われた言葉を思い返して、私はムカムカとする気持ちのままに床をダンダン踏み鳴らしながら歩いていく。

もしこの神殿が木造りでできていたなら確実に踏み抜く勢いだが、床も壁も天井も何もかもが天然石でできているこの神殿が壊れる心配は、幸いにもない。

不審者の侵入を防ぐためか、はたまた「白き御遣い」様が脱走するのを防ぐためか。

王子たちによって、専用に与えられた部屋に押し込められた私は「なんえとじこめーうんでしゅか！（何で閉じ込められますか！）」と外鍵の付けられた扉の前で抗議の声を上げたのだが、返ってきたのは王子の「ほんの一時だ。良い子にしてろ」という素気無い言葉と、アラヴィの「御遣い様。発音が元に戻っていらっしゃいます。どうぞこの機会に特訓なされると宜しいかと…」というやんわりしつつも厳しい言葉だった。

アラヴィのことは味方だと思っていたのにこれはちよつとショックだった。…もしも獣の姿に戻ることがあったらアラヴィのベッドや椅子にもたっぷりと私の毛と脂を擦りつけてやる！

…おそらく私をいろんな危険から遠ざけるための処置なのだろうとは、分かっている。私の存在というのは誘拐の危険すらある貴重なものらしいということは山を下りる時に散々聞かされてきた。

私を心配するその気持ちはありがたいが、閉じ込められる私としてはこの状況には全く納得がいかない。これでは私は鳥かごで飼われている野鳥のようなものではないか。

閉じ込められた私はしばらくの間頬をプクーツと膨らませていたが、しかしすぐにハッと顔を上げ

(……ふっふっふ、私を舐めていませんか？ 諸君！)

と不敵な笑いを浮かべた。

確かに私はヨチヨチ歩きで、言葉もおぼつかない。

見た目にも小学生ですらない年齢の幼女だし、「鍵をかけておけば出入りできないから大丈夫だろう」と彼らが思い込むのも無理はない。

しかし！私をそんじょそこの幼女と一緒にしては困るのだ！

私は部屋の前から人の気配が完全に消えたのを確認すると、さっそく行動を開始した。

脱出ルートを確認する為である。

ああまで言われて黙って閉じ込められているのは性に合わない。絶対にこの部屋を抜け出してやるのだ！

部屋をグルリと見回してみたところ、この部屋には窓があるもののそれは嵌め殺しの物でとても開きそうになかった。外側から鍵を掛けられた出入口の扉は内側に鍵を解除する場所はなく、この部屋はまさに人を閉じ込めるのに適した部屋のようなのである。けっ！

しかし出入口扉の上を見上げてみると、遥か高いその場所には小さな通風孔があった。…小さいが、今の私のサイズなら出ようとすれば出られないことも無い。

他にも出入口になる場所はないかと天井や床も探してみたが、通風孔以外に出られそうな場所は見つからなかった。どうやら廊下とこ

の部屋を繋ぐ唯一の道は、この通風孔くらいのようなのだ。

通風孔から出る、と決めた私はさっそく部屋中の家具を集め始めた。小さな踏み台から大きな飾り机まで。どんなに大きなものでも、私にとっては大した重さではない。もし傍で見ている人がいたなら、こんな小さな体をした幼女が自分の体の何倍もある家具を運んでいる様は、非常にシュールに映るだろう。

先日気が付いたのだが、どうやら私は小さな子供姿になった今も、獣姿の時と同様の力があるらしいのだ。

この力に気付いたキツカケは、菓子包みをうっかり飾筆筒の裏に落としてしまった時のこと。

菓子包みを拾おうと筆筒の裏を覗きこみ、何気なく「この筆筒、邪魔だなあ」と筆筒を持ちあげるように力を込めたら……軽々と筆筒が浮いてしまったのだ。

慌てて後ろを振り返ると、そこには瞋目している王子と、窓の外を眺めるグラウ、カンチーと呼ばれる石と水を使った時計を覗きこんでお茶の蒸らし時間を計るアラヴィ。

3人とも丁度こちらを見ていなかったので私のこの尋常ではない腕力を知らないが――――今回はそれが功を奏したようである。

私は重い家具を壁際に配置し、その上には軽くて安定感のあるものをどんどん乗せていった。

背が足りないの、順番にひとつひとつ階段状に並べていく。

ひとつ乗せては下がり、またひとつ乗せる。そんなことを繰り返していると、ついにドアの上にある通風孔まで家具の階段が到達した。

（後は……ロープがあればいいんだけどな――）

部屋の中をもう一度見回し、私はベッドシートに目を付けた。これを握じって結び付ければ、強度もある程度は確保できるだろう。

私はせっせとシーツを握じって簡易ロープを作り上げると、それを室内の柱に結び付けた。

そして簡易ロープを肩に引っ掛けて家具の階段を上って通風孔までやってくると、ロープを通風孔から外へ垂らす。

するとアラびっくり！脱出ルートの出来上がりである。

「っしや！！やったあ！……っ」と

思わず漏れた歓声に、慌てて口を手で塞ぐ。

声が王子に漏れ聞こえたら元の黙阿弥、せっかくの「部屋脱出計画」も台無しだ。

周囲の気配を探り、大丈夫そうだと確認した私は一人ほくそ笑む。室内を振り返ると、脱出するために移動した家具やシーツで部屋は滅茶苦茶になっているが……、そもそも王子たちが私を閉じ込めたりするから悪いのだ。私は悪くない！たぶん…。

私は念のためロープを数回軽く引っ張り強度を確かめてから、それを伝うようにスルスルと壁伝いに降りる。

ロープの材料となったシーツはいかにも高級品の柔らかなものだったから途中で破けないかドキドキしたが、その場仕上げにはなかなか良いロープが出来上がったようだ。

無事に地面に着地した私は乳白色の廊下の先に視線を向けると、鼻から大きく息を吸った。

最初は閉じ込められた腹いせに部屋を抜け出そうと思っていただけだったのが気がつけば探検気分も盛り上がり、今の私は冒険小説の主人公！……のつもりなのだ。

そう。この廊下の先には、冒険が待っている。神殿探検という名の冒険が！

私は改めて「いくぞー！おー！」と小さな声で気合を入れると、意

気揚々と冒険の第一歩を踏み出した。

こうして私は神殿内の探検に繰り出していったわけなのである。

第23話 不思議な神官

「御遣い様」

神殿内をよちよち歩く私は良く目立つらしい。

こうして歩いているだけでもいろんな人間に声をかけられる。

王子と一緒にいる時は声を掛けにくいのだろうが、一人で歩いている今こそ「御遣い様」に話しかける絶好のチャンス。普通ならばとても会うことのできない天上の存在と是非とも言葉を交わしたい、そんな気持ちが周りからひしひしと伝わってくるので、私は声を掛けられることに若干うんざりとしながらも一応は振り返って挨拶をしていた。ああ、私ってなんていい獣なんだろう。

「御遣い様」

もう一度呼びかけられ、私は胡乱げに振り返った。

さすがにイイ笑顔はもう作れそうにない。

探検に出かけてからというものの、神官に拝まれたり女たちに抱き締められたりツンツンされたりでげんなりとしてきたところなのだ。

おまけに振り返った先に見えたのは――乳白色色のローブ。

また伏して拝まれるのか……、と疲れた気分になりながらも「なんでしゅ……ですか」と顔を見上げた。

(…あれ？ 拝んでない)

意外にも、地面に頭を擦りつけると思われたその男は床に伏すことなく、私の目線と合わせるように膝を折るだけに留めて微笑んでいる。

私は目を丸くすると、改めて男の顔をマジマジと眺めた。

そこにいたのはいかにも人の良さそうな顔をした、優しそうな男だ。年齢は、中年というほど年でもない。かといって青年と呼ぶにしては、男からは妙な落ちつきが感じられる。

髪も目も淡い榛色^{はしばみ}をしていて、この男の柔らかい表情にとっても合っているが、どこことなく不思議な雰囲気を持った男だった。

「御遣い様、初めまして。私はワীগースケツティという者でございます」

「ワীগ、しゅ：スケツティ」

男は一生懸命名前を辿る私を微笑ましげに見つめながら「ワীগで結構でございますよ」とニコリとした。

どうやらこのワীগという神官は、他の神官とは少しばかり毛色が違うようだ。この人ならばまともな話ができそうである。

俄然この男に興味が出てきた私は、ワীগにしっかりと向きなおる。

「ワীগ、わたしに何か、ご、ぎょう……ご、ご、よう、ご、用、ですか」

（ラップのスクラッチ音か私は！）

思わず脳内で突っこむ。

良く使う言葉はだいたい言い易くなってきたが、滅多に使わない言葉はさすがに難しいのだ。

先ほどアラヴィから言われた「どうぞこの機会に特訓なさると宜しかと：」という言葉がふいに思い出されて、心にグサツと突き刺さってくる。ああ、まるで時間差攻撃。私だって自分の発音がマズイことくらい、分かっている。

しかしたどたどしい私の言葉使いを笑う事も無く、ワীগは穏やか

な微笑みをキープしたままゆっくりと近づくと、私とごく近い場所
で視線を合わせた。

ワグの顔が近くにきたので分かったのだが、ワグはやはりそん
なに若いわけではなさそうだ。顔自体にはシワは少なく、若々しい
肌をしているとは思うのだが、その目からは妙に熟成したものを感
じられるのだ。

そう、例えて言うならば前世で出会った或る会社の社長に似ている
かもしれない。社会全体が起業ブームに覆われていたあの頃、一代
で会社を築きあげた彼の目は、ちょうどこんな目をしていて。
強く、熱く、それでいて知略も巡らすことのできる目だ。

一介の神官が持つにしては強すぎる目に私は少し疑問に思いながら
も、次にワグが発した言葉にさらに首をひねった。

「…実は聖地から流れてきた王子殿下のローブを発見したのは私な
のですよ。こんなご縁をいただけたのです、せっかくですから是非
とも御遣い様とお話をしてみたくなりましてお声掛けさせていただ
きました」

穏やかな頬笑みを絶やさないままに語ると、ワグは「あの時は驚
きました、こうして御遣い様にお会いできた今となっては幸運で
した」と言葉を続ける。

（王子のローブ？）

心当たりがさっぱりない。

そもそも王子は山でもローブなんて羽織っていなかったはずだ。
しばらく生活をともししてきた中で、ローブを着ている王子なんて
一切見かけなかった。

私は記憶をたどるように「うーん」と唸る。

心当たりはないが、妙にひっかかるような気がするのだ。

(ローブ、ローブ、ロー………?)

———そして、思い出した。

「あ！わたちがながしゅたろーぶう！」

咄嗟に声を上げたので発音が戻ってしまう。

いかんいかん、と慌てて「わたし、たしゅ、確かに、ローブをなが、しました」と取り繕った。

そう言えば王子を拾ったあの時、私はついっかかり、王子の着ていたローブを川に流してしまっていたのだ。

きつとあのローブが流れに流れてこの山麓の町まで届いたのだろう。そしてそのローブが王子のものだと判明して大騒ぎとなり、グラウたちが王子を迎えに行ったら「白き御遣い」である私も一緒にいた、ということか。

ワグ神官がローブを拾ってくれなければ王子の元にグラウやアラヴィがやってくることもなかったわけで、そう考えると私が人間化したことも王城へ行くことになったことも、全てワグがローブを拾ったことから始まったとも言えるわけだ。

「あの時は聖地に足を踏み入れた人間がいることに動揺してしまいました……、こうして御遣い様にお会いできた今、逆に王子殿下のローブを私が発見できたことを嬉しく思っております」

ワグが胸に手を当てて「光栄なことでした」と呟く。

私は流したローブのことなんぞすっかり忘れていたので、突如現れたこの偶然にキラキラと目を輝かせた。

いやあ、懐かしい！

初めて王子に会った時、ローブに包まれて転がっている王子のことを巨大な糞虫かと思ったものだ。そのときのローブが残っているのなら、ぜひ見てみたいところだ。

「ワグ、ワグ！ローブは、どこにあるので、すか！」

喜んでワグの腕にしがみついた私に、ワグは「フフ」と小さな笑いを洩らす。

さっきまでの他人行儀な態度との差が可笑しかったらしい。

「ちゃあんと取っておいてありますよ。王子殿下が聖地にいらっしやると判明した、証拠品でもありますからね。元は殿下の所有物とはいえ、聖地から流れてきた物は神殿で管理する決まりになっておりますからお返しはできませんが……見ることならできますよ」

ご覧になりますか？と付け加えて顔を覗き込んでくるワグに、私はウンウンと思いつき頭を上下に振った。

（見たい！懐かしいー王子と初めて会った時の、ローブ！）

ローブのことを知ったら、きっと王子も懐かしく思うだろう。あとで、王子にも是非このことを教えてあげたい。

興奮して「ワグ」「ローブ」を繰り返して纏わりつく私に、ワグは「はいはい、では参りましょうね」と苦笑して抱っこをしてくれる。

生まれたての小鹿のような私の足どりで歩いていたら、目的地までどれだけかかるか分からないからだ。

四本足で歩いてもいいなら早いんだけどね。二本足で歩くのって結構怖い。こういうときは「獣姿のほうが良かったかなあ」とどうしても思ってしまう。

（ワーグって目力はあるけど、なんだか保父さんみたいだねえ）

この世界にも保育園や幼稚園があるかは分からないが、彼みたいなタイプはピッタリだろうなと考えながらワーグを見上げる。

ニコニコした笑顔を崩さないところや、ゆったりとした分かりやすい口調はまさに保父さん！という雰囲気だ。

神官服よりもむしろエプロンのほうが似合うかもしれない。

（王子がエプロン着ても似合わないだろうなー）

思わずエプロンを着た王子を想像して————私はすぐさま思考を遮断した。

どうしてなの。

どうしてエプロンを着ている王子を想像すると、裸エプロンで脳内に現れるの…ッッ！

王子の日頃の行いのためか、はたまた水浴びの時に散々見た裸体の印象が余程強いためか。

（絶対、王子の日頃の行いのせいっ！）

一人で百面相をしている私をワーグは不思議そうに見ながらも「では参りましょうか」と抱っこした私をその腕に乗せて安定させると、神殿の奥へ奥へと歩いて行くのだった。

第24話 いなくなった御遣い様（前書き）

王子視点です。

第24話 いなくなった御遣い様

御遣い様がいなくなった。

その知らせが会議場に届いたのは、帰城後の懸案事項を協議している最中のことだった。

突然開いた扉から現れた兵士が顔面を蒼白にして伝えたその知らせに、会議場内は一瞬静まり返る。そして驚きに固まった皆が我を取り戻すと同時に、場内は騒然とした雰囲気包まれた。

「詳しく話せ」

次第に大きくなるざわめきを聞きながらフィヨルド王国の第一王子ラシャールは、入ってきたばかりの兵士を促す。

「は…はい！扉を守っていた護衛兵の話に依りますと、不審な人間を目撃したとのことにございます！」

「不審な人間？」

「どうも話が曖昧で、よく掴めないのですが…兵は一旦はその人間を追ったものの結局見失い、御遣い様の御部屋に戻った時には最早蛻の空と」

「……その兵はどこにいる」

「現在も御遣い様の御部屋の前におります！」

「分かった。とにかく、カノーイの部屋へ向かう」

ラシャールは思いもよらなかった知らせに強張ってしまった体を無理矢理に動かすと、「全員、待機せよ。グラウ、ロイズ、ニコルだけ付いてこい」という指示だけ残して、御遣い様であるカノーイがいるはずの部屋へと足を急がせた。

そもそもラシヤールがカノイーを部屋に閉じ込めたのは、カノイーを子供扱いしたわけでも脱走を危惧したわけでもない。

純粹に、聞かせたくなかったのだ。

己の身に纏わる汚らわしい策謀の話など……あの単純で、お人よしで、寂しがり屋の白い獣の耳に入れたくなかった。

会議場で主に議題に上っていたのは、ラシヤールをあの手へ転送した犯人の今後の処遇について。

単純に考えればフィヨルド王国でも最も厳しいとされる処罰、四肢を拘束し生きたまま肉食獣に食らわせるという生餌刑に処するのが妥当だろうが、しかし実行犯である男はともかく首謀者の女はそう簡単に刑に処せる立場の人間ではなかったので、帰国前ではあったものの取り急ぎ処罰や今後の対応に検討が必要だったのだ。

それに、首謀者として捕縛された人物は——……。

「殿下、こちらです！」

先導する兵士の後をついて足早に部屋に向かうと、そこは確かに先ほどカノイーを閉じ込めた部屋があった。

扉の前にいる兵士はラシヤールの姿をその目に認めると、動揺を隠せない様子で駆け寄ってくる。

「申し訳ございません！！私が、この場を離れたために」

「それは後で聞く。不審な人物がカノイーを攫ったということか」

「いえ、確かに……怪しい人物を見かけ、一時ここを無人にしていまいましたか……攫ったかどうかは」

その物言いに疑問を感じながらも、兵が部屋に視線を向けるのに合わせて、ラシヤールもつられるようにそちらを見る。

そして、兵が誘拐の可能性を肯定しなかった理由を理解した。

「扉の鍵が…そのまま掛かっている」

外側から付けた重々しい鍵は、現在も扉をしっかりと守っていた。しかしそれよりも目を引くのは、上から垂れ下がっているロープだ。扉の上の通風孔を通る形でダラリと垂れ下げられたそれは、扉の足元付近まで続いている。

「それにロープ、か。内側から垂れ下げられているようだな……」

ラシャールは壁に垂れ下がったロープを手を取った。

そのなめらかな手触りに、そのロープの元となったものは寝台のシートではないかとすぐに思い当る。

外部から中に侵入したというよりも、中にいた人間が外に出た痕跡としか思えない状況に、思わずラシャールの口から低い声が漏れた。

「あ奴め……」

「ひとまず、誘拐という可能性は低そうですね」

どこかホッとしたような顔をしているグラウに、ラシャールは小さく頷きつつも苦々しい思いを隠せなかった。

なぜ、カノーイは部屋から脱走したのか。

部屋に不満でもあったのか。山へ帰りたくなったのか。それとも数日間を人間として過ごしているうちに、ラシャールとともに居ることに……飽きてしまったのか。黙って部屋を抜け出すほどに嫌になったのか。

山で共に暮らした日々の中で、カノーイとラシャールの間には種族を超えた絆が生まれた、と。そう思い込んでいたのはラシャールだけだったのか。

それを考えるだけで、ラシャールの胸は焦げ付くような苦しみを覚

えた。

ラシャルはシーツのなれの果てを強く握りしめ、仄暗い光を浮かべた目で乳白色の廊下の先に視線を送る。

カノイーは知らないのだ。

幼いころから陰謀渦巻く中で心を閉ざし孤独に生きてきた男がようやく見つけた幸せの光が、どれほど眩しかったか。

カノイーと得た新しい絆が、どれほど己を救ってくれたのかということ。

あの山でラシャルは初めて心から笑うことのできたのだ。初めて、自分が自分らしく在れる充足感を感じた。そしてカノイーに対して抱いた感謝の想いはそのまま……ラシャルの中で最早何物にも代えがたい想いに育っていつているのだ。

（カノイーは私が見つけた聖獣だ。……どこに行こうとも、私のものだ。決して逃がさぬ）

カノイーは真っ白な髪に珍しい黒眼をしている。カノイーがどこまで逃げようとも、あの容姿ならば目立つだろう。ならば自分はそれを手がかりに、どこまでも追っていくだけだ。

何もかもを諦める癖のついた自分が、唯一本心から欲しいと思えたもの。

それが、あの白い獣なのだから。

「は……?!こ、これは一体……」

すぐ脇で部屋の外鍵を外していたグラウの驚愕の声に、ラシャルは思考の海から意識を浮上させた。

扉のほうを見やれば、グラウや周囲にいた神官たちが目も口も大き

く開き啞然とした顔をしている。

「どうした」

「で、殿下……やはり、御遣い様は誘拐されたのでは……」

「…何だと？」

グ라우から部屋の中を見るように促されて、ラシヤールは扉から顔を覗かせる。

そして、彼らと同様に、ラシヤールも目を限界まで開かせた。

「……！」

荒れている、なんてものではない。

部屋中の物が、まるで重力を無視したかのように軽々と壁際に積み上げられているのだ。

飾筆筒、テーブル、チェスト、飾棚……。驚いたことに寝台の天蓋すらも取り外され、家具の山の一角となっていた。

「これは……御遣い様には無理です。あのような幼いお姿では、椅子一つ持ち上げるのが精一杯かと」

今、彼らの目の前に広がっている状況は、確かにあのカノーイの小さな手ではとても作り出せそうにないものだ。

そうなる、可能性はただひとつ。

「……ロイズ！」

「はっ」

名を呼ばれて背筋を伸ばす兵に、ラシヤールは視線は家具の山に向けたまま指示を飛ばす。

「カノーイの消息捜査に当たれ。：神殿前の警備兵なら何か見ているやもしれぬ」

「かしこまりました」

「それから、ニコル。お前は神官に助力を願え。彼らとて白き御遣いの一大事ともなれば助力を惜しむことはないだろう。探し人に人出は多いほうがいい」

「了解しました」

素早く踵を返し退室する部下たちの後ろ姿に、グラウは「やれやれ：とんでもない事態になりましたな」と溜息を付き、しかしすぐにその表情を兵のものへと変えて引き締めた。

「それでは私も会議場に一旦戻り、指示を与えてまいります」

「ああ。グラウはそのまま会議場で連絡役を果たせ。駐屯兵にも伝令を回してほしいからな」

「急ぎ連絡を取ります。……殿下はいかなさるおつもりですか」

「私は：、カノーイを探す。まだ、神殿内にいるような気がするのだ」

「……………：さようですな。御遣い様もきつと殿下をお待ちのことでしょう」

ラシャルに一礼をし、グラウは足早に会議場へと向かっていく。それを見送ってから、ラシャルは自らもカノーイの搜索のために部屋を出た。

当てのなく神殿内を探し歩きながら、ラシャルはふと考える。どうやってあの部屋からカノーイを連れ出したのかは分からないが、もしもこれが誘拐だったならば。

捕まえた犯人は、ラシヤール自身の手によって拷問にかけてから生餌刑に処してやろう。

ラシヤールの元からカノーイを奪い、フィヨルド王国が見出した聖獣を奪い、アムル神の御遣いを奪った犯人など、何度殺しても足りることなどない。

しかし目を縫うことも耳を削ぐことも、ラシヤールはしないだろう。何も見えず、何も聞こえない状況で与えた拷問などに意味はない。恐怖と苦痛を存分に与えてから、その罪を贖わせてやるのだ。

だが。

もしも誘拐などではなく、カノーイ自身が逃げ出したのであれば。その可能性を思い浮かべて、ラシヤールの表情が陰った。

カノーイは大事だ。哀しませたくない。その想いは嘘ではないが――。

「逃がさぬ……」

ラシヤールの目に、再び暗い光が灯る。

カノーイが忽然と姿を消したことで、ラシヤールは気付いてしまった。

寂しい生を送り続けてきた自分の心に入ってきたカノーイ。彼女を手放すことは、もはや自分の命も立場も何もかもを手放すよりも難しいのだということ。

（……今はそんな心配よりも、カノーイを探すことが先だな……）

小さく溜息をつく、軽く頭を振って気持ちを切り替える。

まずは無事であってほしい。

そう願いながら、ラシヤールは神殿内を再び探し歩き始めた。

第24話 いなくなった御遣い様（後書き）

ようやく王子の名前とヤンデレ気味な性格を、少し出せました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4538w/>

白き御遣いと神子

2011年12月2日20時51分発行